

展示記録

企画展「東北大生の戦争体験」

(東北大学史料館×東北学院史資料センター連携企画「学都仙台と戦争」)

小幡 圭祐・曾根原 理・永田 英明

会期 平成27年9月25日(金)～28年1月29日(金)

会場 東北大学史料館2階 第1・第2企画展示室

一、企画の趣旨と開催の経緯

企画の趣旨と史料館の戦争展示実績

東北大学史料館では、平成27年度の企画展として、「東北大生の戦争体験」展を平成27年9月25日(金)から翌年1月29日(金)までの日程で開催した。

この企画展は戦後70年の企画として、平成26年度の段階から次年度企画として計画していたものであるが、その下敷きとなったのが、過去に開催した二つの戦争関係展示であった。一つは、平成17年度に開催した「[学徒]たちの「戦争」-東北帝国大学の学徒出陣・学徒動員-」展(2005/11/1～2006/2/24)である¹。これは学徒出陣・学徒動員をはじめとする、東北大学の学生動員の実態を体系的に紹介した初めての試みであり、その成果はその後刊行された『東北大学百年史』にも活かされている。

もう一つは、平成24年度に実施した「記録のなかの復興と再生-東北大学の戦災復興資料から」展²(2012/6/13～7/31)で、こちらは、東日本大震災直後という時期を意識し、東北大学における戦後復興関係資料を発掘・紹介することを主眼としたものであった。今回の企画展開催は、これらの展示会の成果に、新たな資料収集や調査研究による知見、とりわけ戦中期の科学動員と学生の関係や戦後の学生文化の復興にかかわる知見を補足し、戦中から敗戦直後にかけの時期を通じた東北大学の学生史を、展示という手法で叙述し直すことを課題とした。

東北学院史資料センターとの連携

あわせて、今回新たに試みとしておこなったのが、近隣大学との連携である。当館が所在する東北大学片平キャンパスは、ミッション系高等教育機関として明治中期以来の歴史をもつ学校法人東北学院の土樋キャンパスに接している。土樋キャンパスには同学院のアーカイブズである東北学院史資料センターがあり、当館とは直線距離で約500メートルという至近距離にある。同センターでは近年、戦時期のいわゆる「学徒出陣」等に関する資料の調査・紹介などに着手しており³、戦前・戦中期の仙台における代表的な私立高等教育機関であった同校のアーカイブズと連携して展示をおこない、両者をあわせて見ていただくことで、戦争と大学・戦争



と学生という問題を、個別の大学の中だけでなく仙台という地域・都市の広がりの中でとらえることが可能になるのではないかと考えた次第である。このような試みはおそらく仙台では初めてと思われるが、今年度の全国大学史資料協議会の総会・全国研究会が仙台で、東北大学と東北学院大学を会場校とする形で開催する予定になっていたことも手伝い、両校関係者での協議の結果、初の連携企画が実現することとなったのである⁴。

二、展示の構成と内容 企画の検討と準備過程

東北大学史料館の展示は、前半（第1企画展示室）を日中戦争開始後戦争末期に至る動き、後半（第2企画展示室）を仙台空襲・終戦から戦後の学生生活復興期の動向にそれぞれあて、前半の展示は永田・小幡、後半は曾根原・小幡という組み合わせで展示物の選定と展示パネル・キャプションの作成をおこなった。展示の準備は5月以降、まず前回展示の成果確認と新規に加えることが可能なテーマの検討・選定から着手し、7月15日には準備の中間報告会を当館の「大学アーカイブズセミナー」（第3回）として開催。小幡が「東北帝国大学における科学動員と大学院学生」、永田が「東北帝国大学の学徒勤労働員」と題した報告をおこなった（本誌当該報告参照）。その後7月下旬にはおおよその内容が決定し、展示パネル・キャプションの作成に入った。展示パネルは、今後の保管・再利用の便宜を考慮しバナー式のパネル（いわゆる掛図）を製作することとし、8月末に原稿を入稿。同時に展示物を確定しキャプション原稿を作成した。

9月14日（月）～18日（金）には、学術資源研究公開センター所属の3施設（東北大学総合学術博物館、東北大学植物園および当館）で担当する博物館学VI「館園実習」の受講生11名が当館での実習として展示準備に参加した。実習では展示資料の出納・配列などの作業に参加すると共に、回顧録等から当時の学生の戦争体験を抜粋紹介するパネル展示を企画・製作してもらうこととした。

またこうした動きと併行して、連携展示に関する東北学院との打合せを5月以後ほぼ月一回のペースで重ねた。そこでは連携企画のタイトル（「学都仙台と戦争」）や開催期間、広報協力のあり方などについて協議し、決定するとともに、各校の展示内容や関連する情報の相互提供をおこなった。その過程で、連携校の展示に関する情報交換もおこなわれ、当館からは、東北帝大工学部教授で、戦時中東北学院に設立された東北学院航空工業専門学校の初代校長となった宮城音五郎の関係資料（手帳）を提供することとなった。

展示の内容（1）一戦中期

前半の展示は、前掲の「[学徒]たちの「戦争」－東北帝国大学の学徒出陣・学徒動員－」開催時の成果をもとにしつつ、その後の資料収集や調査の成果を補足する形となった。展示はさ



らに(1)「銃後の学生たち」(2)「出陣する学生たち」(3)「学徒動員の実像」の三部に分けて構成した。

(1)は日中戦争がおこり学内にも様々な戦時対応が求められはじめる1937年後半以降学徒出陣・学徒動員が本格化するまでの時期をとりあげ、具体的には①学内教職員・学生の応召状況、②銃後奉公組織としての「東北帝国大学銃後会」の発足、③長期休暇などにおける「集团的勤労作業」としておこなわれたいわゆる「勤労奉仕」の実施状況、④銃後会と学友会組織を戦時動員組織として発展的に解消再編した「東北帝国大学報国会」の発足、などといったテーマをとりあげた。(2)は、大学における軍事教練の必修化(1939年)、兵役法の改正と繰り上げ卒業の実施(1941年)といった段階を経て1943年12月以降いわゆる「学徒出陣」という形で在学中の学生が多数入営・入隊していくようになる状況を、統計的なデータと、関連する措置や行事に関する大学の行政資料、そして当時の学生自身による手記などを組み合わせ構成した。

(3)は1944年春以降本格的に展開する、いわゆる通年動員体制下における学生の「動員」状況を扱ったが、(1)(2)が前回展示の成果をベースにした展示となったのに対し、(3)については、新たな内容を積極的に盛り込むことができた。一つは、理・工学部を含めた、学徒動員の全学的な状況である。それを可能にしたのが、今年度に入り新たに寄贈を受けた、旧学生課における学徒動員関係の事務記録(日誌および動員生徒からの書信綴)であった⁵。日誌には動員をめぐる学生課や主任教授と企業の間での交渉・調整の状況、文部省の動員本部との関係、そして個々の学生の動員をめぐる具体的な状況が記され、動員の全体像に近づく上で重要な情報源となった。

もう一つが、いわゆる「科学動員」と学生の関係、という問題である。これに関しては、前回の展示以降、吉葉恭行氏の一連の研究によって⁶東北帝国大学における大学院特別研究生制度の実態が明らかにされたことが大きい。大学院特別研究生制度もまた、戦時中においては自然科学系の分野に圧倒的な比重を置く形で運用されていた。創立期以来理学部・医学部・工学部といった自然科学系の学部によくの「理系学生」を抱えていた東北帝国大学の学徒動員を語る上では、文科系の学部学生の動員のみでなく、理工系や大学院学生等の状況をも明らかにする必要があり、近年の資料収集や研究の成果を反映してこうした課題に迫ることを、今回の展示では意識して取り組んだ。この一環として、当時特別研究生であった酒井高男名誉教授のご厚意で関連資料(辞令・写真)を借用し、実物の展示やパネルの作成に活かすことができた。なお酒井名誉教授からの資料借用に際しては、前記吉葉教授(秋田高等工業専門学校)に仲介いただいた。

展示の内容(2) 一戦後復興と学生の連携

後半は、1945年7月10日未明の仙台空襲以降の、東北大生の戦後復興をテーマとした。仙台空襲を叙述の起点に置いたのは、仙台市街に甚大な被害を及ぼしたこの空襲が、学都仙台の戦後復興を語る上で欠かすことのできない意味を持つからである。東北帝国大学における仙台空襲の被害状況・その後の施設等の復旧については、すでに前回の展示(記録の中の復興と再生)においても整理紹介しているが、今回仙台市街地の被災状況を含めあらためて関係資料を精査し展示を構成した。

しかしこうしたハード面の復興状況とともに今回の展示において力点を置いたのが、学生生

活再建に向けた学生たちの主体的動向である。とりわけ、展示の準備過程であらためて浮き彫りになってきたのが、そうした学生たちの活動が、個々の学校の枠組みを越え、仙台に所在する大学・高等学校・専門学校等の学生組織や在学生在が広く連携する形で進められていた、という事実である。その最も典型的な例が、1946年初頭から50年3月までの約4年間にわたって活動を続けた、「在外同胞救出仙台学生同盟」（以下「同盟」）であった。この



組織には、東北帝国大学・第二高等学校・仙台工業専門学校・宮城県女子専門学校・宮城師範学校・東北学院専門学校・宮城学院女子専門学校・東北薬学専門学校・常盤木学園などといった学校から広く学生が参加し、仙台駅頭での引き揚げ者の支援を中心に様々なボランティア活動をおこなった。またこうした同盟の活動とも関わる形で、戦後いち早く活動を再開した各学校の演劇部が連携して「仙台学生演劇同盟」が結成。大学生協の前身となる「学生組合」もまた当初は学校の枠組みを越えた形で活動がはじまり、「同盟」の事業とも連携していた。このような状況は、戦後の物資不足・統制経済下で各学校単位での活動に制約が大きかったという事情も反映しているが、戦後の仙台における学生生活の再建が、「学都仙台」という枠組みの中で広がりをもっておこなわれたことは、「学都」を標榜する都市仙台の戦後復興を考えるテーマとしても、これまで以上に注目されて良いであろう。

なお、「同盟」の資料を今回展示できた背景にも、実は他大学との連携がある。この資料は、宮城学院女子大学人間文化学科の大平聡教授が学芸員課程のゼミ活動の一環として実施した、戦時下の宮城学院に関する調査活動の過程で関係者から情報提供を得たものであり、宮城学院女子大学が2002年に開催した特別展「戦時下の宮城学院」においてその一部はすでに展示されていた。資料はその後「同盟」参加者のもとに戻され所蔵されていたが、その後の資料保存・公開の便宜を考慮した結果、2013年に至り大平教授を介して当館に寄贈されることとなったのである。

三、広報および公開状況と来館者の反応

開館状況と広報

展示は、企画展初日の9月25日（金）以降、11月1日（日）に至るまでの1ヶ月強は、土曜日・日曜日も含め開館を実施した。

展示会の広報は、ポスターおよびホームページによる告知をおこなうとともに、マスコミ各社へのプレスリリースをおこない、期間中にテレビ2件（NHK 仙台放送局および東北放送）、新聞3件（河北新報、朝日新聞、読売新聞）の取材を受けた。新聞報道は各紙が結果的に10月（河北新報10月22日）、11月（朝日新聞11月27日）、12月（読売新聞12月21日）と月を隔てて報道し、長期にわたって継続的に報道されることとなった。

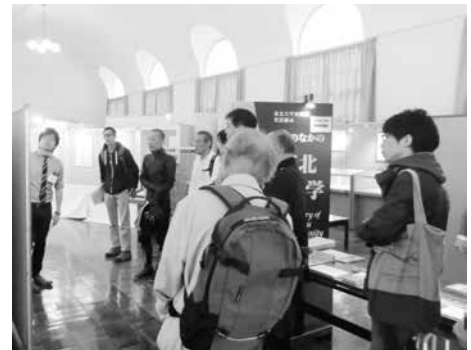
またこれとは別に実施した広報活動として、SNS（ソーシャル・ネットワーク・システム）による情報発信があげられる。Twitterでは、個々の展示資料や展示に伴い得られた知見につ

いて合計102回の情報発信をおこない、その一部はFACEBOOKにも転載して情報を発信した。

関連イベント

関連イベントとしては、まずこの企画展独自のイベントとして、10月24日（土）に、東北学院史資料センターと合同のギャラリー・トーク「学都仙台と戦争」を開催した（参加者延べ13名）。午後1時からまず当館、ついで2時半から東北学院史資料センターの展示解説をリレー式でおこなった（写真上）。

また他の行事と連動した共催イベントとして、まず10月7日（水）に、前述した全国大学史資料協議会との共催で、大平聡宮城学院女子大学教授による一般公開講演「学校資料の保存と活用」⁷を開催した（会場：片平さくらホール。参加者90名 写真中）。また同月10（土）・11（日）の両日には、隔年で開催される東北大学付置研究所一般公開「片平まつり2015」に共催機関として参加した（写真下）。



来館者数とアンケート回答

全期間を通じた来館者は、合計2,484名にのぼった。（ただしこのうちの971名は上記の片平まつり開催期間中2日間の入場者で、これを除くと合計数は1,513人）。一日あたりの平均入場者数は全期間で26.4人となる。会場では来場者に対し展示の概要を説明するパンフレットとアンケートを配布した。アンケートは展示に対する感想や意見を自由に記述してもらうもので、統計的なデータを提示することはできないが、回答の中から代表的なものをいくつか抜粋することとする（回答は12/28現在のものから抜粋。回答の一部を省略抜粋した場合がある。）。

- ・置かれた状況が違うとはいえ、当時の学生さん達の生き様を目にすると、思わず自分が恥ずかしくなった（学生）
- ・時代がすこしずれていたら、自分も自分の子供達も学徒出陣などという経験をしたかと思うと、とてもおそろしく思います。当時の学生の気持ちを考えると、涙が出てきます。昨今時代の曲がり角を迎えています。戦争が2度とおこらない様多くの人にこの展示を見て欲しいと思います（一般）。
- ・昭和22年度の卒業式の総代答辞を生徒に読ませたいと思いました。また私自身も何かを胸に突きつけられたような気がしています（一般 中学校教師）。
- ・戦争を知らないので、実際に鉄兜を見たのも初めてでした。なぜ戦争をしたのか、かなしくなりました（高校生以下）
- ・私は戦争を知らない世代であるが、学業を途中で断念し戦争にいかなくてはならず、その

後消息不明な学生もあり、改めて戦争を起こしてはいけないという思いが強くなった。

- ・戦争のことをくわしく知れて良かった。昔のことにも目を向けるべきと思った（高校生以下）
- ・戦争中・戦後の動員、学生生活、当時の思いなどがよく分かった。史料保存は大変かと思う。貴重な資料であり、更なる保存を望みたい（一般）。
- ・戦時体制下の学生・教員・職員の方々の御苦勞を思い、一層の平和と教育に決意を新たにしました（教職員）
- ・今、見るべき展の数々だ、と感じました（一般）
- ・戦地へ赴く学生の苦惱の作文に胸が痛みました（一般）
- ・新しい史料、戦後の引きあげ支援、金属工学科的場先生の手記など、たいへん興味深く見ました（卒業生）
- ・父が半年繰り上げで法文学部を卒業いたし、昨年亡くなりました。存命であればさぞ喜んでいたことでしょうに（一般）。
- ・東北大生が戦争へ、学びを取り上げられたと、理不尽さを感じました（一般）
- ・私の父は貴学から学徒出陣した直後終戦となり命を拾いました。今の若い人にも切実に歴史について知って欲しいと思います。

四、まとめと課題

戦後70年にあたる今年、全国の多数の大学においても、戦争と大学・戦争と学生をテーマにした展示会が開催された。10年前の戦後60年に際しても多くの大学で展示がおこなわれたが、印象論ではあるが、今年状況は10年前を上回る広がりを持っているように思われる。今回東北学院との連携で企画展を開催することができた背景にも、そうした諸大学における戦争資料に関する関心の高まりがある。

今回東北学院との連携展示によって浮き彫りになったのは、一つには「大学の戦争体験」の多様性であり、もう一つには「学生の戦争体験」の共通性・関連性である。米国協会によるミッション系の高等教育機関として設立され、宗教教育・教養教育をその重要な柱として発展を遂げてきた東北学院と、近代国家建設のための先端科学研究とエリートの育成を目的に設立された東北大学とでは、戦時下において抱えていた課題にも当然ながら大きな開きがあった。しかしそこで学生生活を送る学生たちが抱える課題には、共通するものも少なくなかった。戦後の混乱期、学生たちが自分たちの力で学生生活の再建に尽力せざるを得ない中、彼らが意識したのがそうした在仙学生の中に共通する課題意識であったのではないだろうか。そうした学生のネットワークを考えることは、個別大学史に傾きがちな「大学史」を考える視点として、また「学都仙台」という枠組みを考える際の別の視点として、意味を持っており、今後意識していく必要があるだろう。

すでに述べたように、当館では過去にも戦争と大学や学生をテーマにした展示会を開催している。今回の展示内容は、これらの展示会、とりわけ10年前に開催した「学徒たちの戦争」展と重なる点も多いが、展示の役割は、決して新しい事実・新しい資料を出すことのみにあるわけではない。戦後60年、70年といった年数はあくまでその一つの契機に過ぎないが、それを繰り返していくことが今後も重要と思われる。むしろ大学の戦争体験を伝える記録、そこから得られる情報を繰り返し整理し、その意味を繰り返し世に問うていくことこそ、戦争という経験

を、リアリティをもって伝えていく、ほぼ唯一の方法といえるのではないだろうか。

なお、本展示会は、平成28年3月1日（火）から18日（金）にかけて、東北大学附属図書館本館内においても開催する予定となっている。

（付記）本報告のうち、前半の展示全体にかかわる概要報告は、永田が執筆した原稿に曾根原・小幡が加筆修正を加え成稿した。後半の展示キャプション等については、各自が分担執筆した内容をそのまま掲載した。

注

- 1 永田英明「『学徒』たちの『戦争』－東北帝国大学の学徒出陣・学徒動員－」『東北大学史料館紀要』第2号、2007年3月
- 2 永田英明「記録のなかの復興と再生－東北大学の戦災復興資料から」『東北大学史料館紀要』第8号、2013年3月
- 3 河西晃祐「東北学院に残された学徒出陣史料について」、星浩和「往復文書類綴」と「主務省関連書類綴」について－学徒出陣関連資料を中心に－、ともに『東北学院資料室』13号（2014年3月）所収
- 4 東北学院史資料センターの企画展「ミッションスクールと戦争」については、河西晃祐「東北学院史資料センターのご案内」『東北大学史料館だより』No.24（2016年3月）を参照されたい。
- 5 この資料は、小西保氏（元東北帝国大学学生主事補。戦後京都府立女専・京都府立大学教授）が保管していた資料で、今年度に入りご遺族から寄贈を受けた。
- 6 吉葉恭行『戦時下の帝国大学における研究体制の形成過程：科学技術動員と大学院特別研究生制度 東北帝国大学を事例として』（2015年）東北大学出版会
- 7 大平教授の講演は、全国大学史資料協議会の研究叢書として近く刊行される予定である。

展示記録

「東北大生の戦争体験」展

展示資料・展示解説（パネル・キャプション）一覧

【はじめに】（パネル展示）

70年前、虚脱と安堵の中で、新たな「戦後」という時代の建設がスタートしました。それは「戦争」という苦く辛い経験を経た上での「戦後」であったはずです。

今年度の企画展では、かつての東北大学の学生たちがくぐり抜けた「体験」を資料や証言をもとに紹介することで、1945年を境とした戦中・戦後初期の学生たちが「戦争」をどのようにとらえ、「戦後」に何を見いだそうとしていたのか、皆さんとともに考える機会としたいと思います。それはいうまでもなく、現代に生きる私たちにも様々なヒントを与えてくれるはずです。

また今年の企画は、「学都仙台と戦争」と題した、東北学院史資料センターとの連携企画の一環でもあります。学生と戦争というテーマは、戦前から「学都」とよばれていた仙台という都市・地域の問題でもあり、両大学の展示をあわせて御覧いただくことで、さらに多様な視点、多様な素材を、皆様にご提供できるのではないかと考えております。

多くの皆様にこの展示を御覧いただき、ご意見・ご感想をお寄せいただくことができましたなら幸いです。

【第一企画展示室】

〔1〕「戦後」の学生たち

A. 「学園のなかの「戦時」」

A-0. 解説パネル→右ページ

A-1. 防空訓練用防空兜

当館蔵／石津照璽旧蔵

戦時中に教職員に配布されたもの。

A-2. 東北帝国大学銃後会趣意書

1938年（昭和13）当館蔵／附属図書館移管『雑書類』

教職員各位に対し、銃後会の趣旨を説明し寄附を募る文書。学生課長である武内義雄が会長をつとめている。

A-3. 理学部生物学教室での壮行会・追悼会

1942年（昭和17）当館蔵／生物学教室旧蔵資料『生物学会記録』

壮行式や出征者への慰問袋発送など、戦時下の教室内での雰囲気がわかる。

6月11・18日、9月3日 教室からの出征者への慰問袋発送

7月23・25日 応召者壮行会で国旗を送る

9月16日 物故学生の追悼会

A-4. 応召した教官に対し学生たちが贈った寄せ書き国旗

1938年（昭和13）当館蔵／曾我部静雄旧蔵資料

法文学部の曾我部静雄（東洋史）助教授の応召に際し、高校の後輩でもある旧制松本高校出身の学生たちが送別に贈ったもの。

「銃後」の学生たち 学園のなかの「戦時」

1937年(昭和12)7月にはじまる日中戦争は、終結のあてのないまま拡大し泥沼化していく。そのようななかで、「国民精神総動員」が叫ばれ、学校現場においても教職員・学生問わず様々な形で戦争協力が求められていった。

当時の大学生たちは、徴兵年齢を過ぎても在学中は兵役が猶予される特別な存在であったが、彼らもこうした動きに全く無縁だったわけではない。東北大学では、1938年(昭和13)以降、夏休みの「集団勤労作業」や「銃後会」による奉仕・慰問活動などが始まり、それはやがて戦時下の学友会組織ともいえるべき「東北帝国大学報国会」、さらには「報国隊」へと引き継がれていく。学内では召集を受けた教職員等の壮行会、ひいては戦死者の慰霊祭などもおこなわれ、平常の学生生活の各所に、「戦時」を意識する機会がちりばめられていった。

「銃後会」から、「報国会」へ

「銃後奉公」が叫ばれる中、東北帝国大学では1938年4月に学生・教職員を会員とする「東北帝国大学銃後会」が結成された。この会は兵士・遺家族への慰問・献金に加え講演会や勤労奉仕・体育行事なども主催し、また前線にいる卒業生の活動を紹介するなど、学生の時局認識の啓発もおこなっていた。

1941年(昭和16)4月、この銃後会は、あらたに結成された「東北帝国大学報国会」に吸収解消される。もっとも報国会は従来の銃後会の事業のみでなく、本来戦時とは無関係な学部学友会、体育・文化系のクラブ活動なども戦時協力・鍛錬を建前としたかたちでとりこんだ、学生の「修練組織」であった。学生たちはまだスポーツや文芸を楽しむことができたが、そこにも「銃後」の備えのためという建前が、持ち込まれはじめたのである。

東北帝国大学報国会の組織

中央会	教養部	講座部・図書部・文芸部・美術部・音楽部 映画部
	鍛錬部	剣道部・柔道部・陸上競技部・山岳部 野球部・庭球部・卓球部・籠球部・蹴球部 闘球部・水泳部・スケート部
	国防訓練部	銃後部・作業部・乗馬部・射撃部・汽艇部 航空部
	厚生部	売店経営・下宿斡旋・健康相談・学生食堂 集会所運営
学部会	自修会	理学部学友会(継続)
	長陵部	医学部学友会(継続)
	工明会	工学部学友会(継続)
	尚中会	法文学部学友会(新設)

応召者と慰霊祭

日中戦争開始後、学内でまず戦地に向かったのが、助手・副手などの若手教職員や猶予年齢をこえた年輩の学生であった。特に応召者を出したのが医学部で、多数の助手・副手が軍医として従軍している。このほかにも各教室・研究室で教官や先輩の壮行会がおこなわれ、学生たちもそうした光景を目の当たりにするようになっていく。

戦死者の慰霊祭は、1938年秋に職員4名・学生1名を対象におこなわれる。その後全学での慰霊祭はしばらくなかったが、1941年10月に日中戦争開始後の戦死者18名の教職員・学生に対する慰霊祭が行われ、以後毎年の恒例行事となった。その数は、いわゆる「学徒出陣」の直前である1943年10月の慰霊祭では28人にまで膨らんでいた。



法文学部経済科の教員と学生
附属図書館(現史料館)の裏庭にて。
ゲートル・軍帽姿の教員がみえる。



出征する学友を見送る医学生
1937年8月 川内にて

東北帝大の応召者(1937～1941年9月。ただし学生・生徒は1940年までの数字)

所属学部等	理	医・病	工	法文	金研	農研	通研	図書館	本部	合計
助教授・講師		7		3						10
助手・副手	12	94	4	4	1		1			116
技術系職員	1	10	11?	1	20					43?
事務系職員	9	13	7	3	4	5		5	18	64
学生(大学院)	3	5	5	2						15
学生(学部)	9	6		25						40
生徒(聴講・専攻生)		1		5						6

B. 勤労作業と報国隊

B-0. 解説パネル→次ページ

B-1. 工学部生の矢本勤労作業出欠調査表

1942年(昭和17)10月 当館蔵/『評議会議事録』昭和十七年度

1942年10月に行われた海軍航空隊矢本飛行場(現航空自衛隊松島基地)での勤労作業への、工学部学生の参加状況。理・医・法文学部あわせた全学では661人が参加したが、一方欠席者も605名にのぼり、必ずしも全学生が積極的に参加していたわけではないこともわかる。評議会では欠席学生の扱いが問題となり後日作業を課すことになった。法文学部では教授に「叱ってもらう」ことにしたという。

B-2. 医学部学友会誌『長陵』50号大陸特集

1940年(昭和15)1月 当館蔵

「興亜学生勤労報国隊」への参加学生や、夏休みの病院実習で満鉄(南満州鉄道)の病院に派

「銃後」の学生たち 勤労作業と報国隊

集団的勤労作業

1938年(昭和13)以降、大学以下の諸学校には夏休みなどを利用した「集団的勤労作業」が課され、教育課程に組み込まれていった。東北帝国大学でも、軍の飛行場や護国神社の造営工事など大小各種の「勤労奉仕」に学生たちが駆り出された。もっとも学生たちのスタンスは様々だったようだが。



青葉山護国神社造営の勤労作業
1940年(昭和15)
東北大学のほか様々な学校の学徒
が作業をおこなった。

増田飛行場の勤労作業 1939年(昭和14)

現在の仙台空港。戦中期は陸軍飛行学校の
飛行場として使われた。



興亜学生勤労報国隊

学生の中には、前線での体験を求め、1939年(昭和14)に始まる「興亜学生勤労報国隊」等に参加する者もいた。

この事業は全国の学生を前線の占領地や開拓団に派遣した。東北帝国大学からは医学部から毎年学生が派遣され、現地病院や移民団での診療、防疫活動などに従事した。写真は昭和15年度の興亜学生勤労報国隊医療班東北帝大隊。満州・農安(現吉林省農安県)にて。



固いぞ學園の護り 東北帝大報国隊生る

東北帝国大学報国隊

1941年(昭和16)10月8日 河北新報

学校報国隊は、勤労作業や防空演習などでの学生たちの指揮系統を明確にした軍隊組織で、学部ごとの大隊と、専門分野の学生で編成される特技隊(防毒隊・医療隊・電気工作隊など)で構成された。戦争末期に至るまで、学生たちはこの「報国隊」の命令によって、動員されていくことになる。



医学徒報国隊

1941年(昭和16)からは、医学系学生による夏休みを利用した事業として「医学徒報国隊」の活動も始まる。無医村診療や集団検診・結核調査などを中心とするこの事業もまた、総力戦に備え国民の健康保持・体位向上を図るものであった。東北帝国大学の報国隊は青森県や岩手県での無医村診療・結核調査などをおこなっていた。

遣された学生の報国記事。こうした記事は、戦地と切り離されがちな「銃後」の学生たちの眼を前線に向けさせる役割も持たされていた。

B-3. 無医村集団検診記

1944年(昭和19)5月5日 『良陵』第60号

1943年(昭和18)8月に青森県の「無医村」で実施された、「東北帝国大学医学徒報国隊に参加した学生の参加記。8月26日の記録によれば、学童の便検査を医学部学生が担当している。報国隊の調査は乳幼児検診、児童検診、妊婦検診に重点を置いており、学生はこの調査を「我国の食糧増産に敢闘しつゝ、ある医者無き村の人々を守る事は前戦(ママ)に将兵を守る軍医と同様」と位置付けている。

〔2〕「出陣」する学生たち

C. 「近づいてくる「戦争」」

C-0. 解説パネル

「出陣」する学生たち 近づいてくる「戦争」

戦争の長期化と拡大により、「銃後」の学生たちにも、早く「戦力」となることが次第に求められていく。大学における教練必修化、大学生に対する徴集猶予期間の短縮、「繰り上げ卒業」の実施、これらによって、学生と戦争の距離は、着実にせめばめられていった。そして1943年(昭和18)10月、学生の「特権」であった在学中の徴集猶予措置そのものが、ついに停止される。文科系を中心に、20歳を超えた多数の男子学生が、学生身分のまま陸・海軍に入隊し、兵士としての訓練を経て次々と戦地へと投入されていく。

学校教練の強化

1939年(昭和14)以降、それまで任意科目であった軍事教練が、大学でも必修科目とされる。もっとも東北帝国大学では当初教練に必要な武器がなく、軍が戦利品として入手した小銃・銃剣の配給をあわてて申請する始末であった。しかし同年9月からは正課としての教練をはじめ、これを担当する配属将校も増員され、次第に定着・強化されていく(写真は医学部での教練)。



繰り上げ卒業の実施

1941年(昭和16)10月、対米戦争が現実味を帯びてくる中、下級将校を大量かつ緊急に確保するため、大学・専門学校等の学生生徒を予定より3か月早く卒業させる「繰り上げ卒業」を行うことが決まった。同時に公布された勅令で、学生は卒業8か月前に徴集猶予期間を終えたものとして扱われ、多くの学生たちが、あわただしく徴兵検査を受けた。開戦後の12月末に行われた卒業式は、学生たちの壮行会の様相を呈した。

翌1942年(昭和17)からは繰り上げ期間は6か月とされた。陸・海軍は卒業予定の学生を対象とした勧誘合戦を展開。そのためキャッチフレーズとして登場したのが「学徒出陣」という言葉であった。

繰り上げ卒業式での学生総代答辞(抜粋)
1941年12月28日

・我々の大多数は、卒業と共に銃をとって一身奉公第一線に立つことでしょう。銃後にあっても戦線にあっても、どこまでも諸先生の日頃の御教訓を守り、真に最高学府の卒業生として、更に栄えある我が東北帝国大学の誇りを持つ者として、この時局を背負って立ち、他日の大成をここに誓うものであります・・。

(東北帝国大学学報265号)

理学部生物教室の日記より

1943年 春

例年の通り春にはどこかに遠足したかったのであるが、授業時間、汽車の便などの繰り合せがつかなかった。学期は短縮せられ、汽車は戦時重点物を輸送して居る。元来このような会の遠足などは重大な事件ではないのであるが、教室の会議にまで上るほどになった。中止!無期延期!

一切を戦時目的遂行のために!教授も学生も皆がその本分のために全勢力を傾けるべきであるとの意見となる。

(生物学教室寄贈「生物学会記録」)

海軍入隊中の工学部卒業生からの音信

1943年 夏頃

小生昨年九月卒業と同時に海軍予備学生として入隊、以来帝国海軍航空整備術の修得に大奮です。九月の任官までは海軍の学生生活で、整備に必要な学科を聞いたり、柔剣道、短艇、相撲等で身体を鍛えたりしています。大学卒業の時もう試験は一生あるまいと喜んだのにあにはからんや、海軍は手荒く試験をやらせ新学士殿もかかなくてもよい恥をさらしている状態です。

(『工明会誌』二五号)

C-1. 陸軍兵務課編 学校教練教科書 後編(術科之部)

1942年(昭和17) 当館蔵/小山寿一資料(旧制二高資料)

軽機関銃・擲弾単筒等の使用方法、射撃の心得や集団戦闘の方法、さらには偵察、測量術、命令報告の方法等に至る各種の事項が記されている。東北帝国大学には1939年以降3名の配属将校が勤務し教練を受け持った。

C-2. 軍事講習の受講ノート

1944年(昭和19) 当館蔵/原田隆吉氏旧蔵

東北帝国大学の配属将校永田大佐による講義の受講ノート。古川・中新田・鳴瀬川など県内の具体的な地域を想定して、作戦行動の案を検討・解説している。戦時下の大学における軍事

教習の内容を具体的に知ることができる。

C-3. 繰り上げ卒業実施に関する文部大臣への意見書

1941年(昭和16)10月 当館蔵/『評議会議事録』昭和十六年度

繰り上げ卒業実施に関する文部省からの内達に接し、学内から意見を集約に基づきその弊害を述べて反対を申立てた意見書。東京帝国大学と連携して提出したようである。

C-4. 高戸顕隆著『学徒出陣』(毎日新聞社刊)

1943年(昭和18)8月 個人蔵

海軍報道部中佐高瀬五郎中佐監修、海軍主計中尉高戸顕隆著。海軍予備学生の大量募集にむけ、同年9月に大学等を卒業する学生たちに志願を呼びかける目的で作成された冊子。『学徒出陣』という言葉がはじめて使われた刊行物として知られている。

D. 「学徒出陣」

D-0. 解説パネル

「出陣」する学生たち 「学徒出陣」

学徒出陣

1943年(昭和18)10月1日、学生の徴集猶予が廃止され、20歳に達したすべての学生は徴兵検査を受けることとなった。理科系の学生はその後卒業まで軍隊入りを延期されたが、法文系学生の合格者は、ほぼ例外なく陸・海軍に入隊することとなった。

「学都」仙台では、「学徒兵」を送り出す様々な壮行行事がおこなわれた。東北帝国大学では10月8日に片平構内の運動場で壮行会がおこなわれ、また11月18日には、宮城野原練兵場(現在の宮城野原運動公園周辺)で、東北・北関東・新潟地区の出陣学徒を対象にした壮行会がおこなわれた。この壮行会は文部省主催の学徒軍事演習にあわせて実施され、63校から1万人弱の学生が参加。東北帝大からは最大の566名が参加したという。こうした「壮行式」に限らず、音楽会やスポーツの大会など「出陣学徒」の壮行行事が学内外で行われ、杜の都から多くの「学徒兵」が送り出された。

出陣学生の数

東北帝国大学では、1943年12月に、法文学部767名の学生が陸・海軍へ入隊することとなった。最高学年で一年後の卒業が見込まれる学生は、「仮卒業証書」が授与され、そのほとんどは、再び大学に戻ることなく一年後の1944年(昭和19)9月、自動的に「卒業」扱いとなった。

「学徒兵」は、その後も引き続き生み出されていく。では東北帝国大学から、あるいは「学都」仙台から、実際にどのくらいの数の「学徒兵」が戦地に送られたのだろうか。残念ながらその全貌は現在もまだ明らかにはなっていないが、東北帝国大学では1944年8月現在で954人の学徒兵が在籍していたことが知られ、その後の入隊者を含めると、終戦までその数は千数百人まで膨らんだと思われる。

東北帝国大学の入隊者

学部・科	1943年12月時点				1944年4月時点		1944年8月時点	
	既入隊者数	12月入隊者	合計入隊者数	比率 ²⁾	入隊者数	比率 ²⁾	入隊者数	比率 ²⁾
理学部	15	0	15	4.7%	18	5.6%	22	6.7%
医学部	6	0	6	1.4%	6	1.5%	6	1.1%
工学部	29	0	29	4.7%	16	2.6%	24	4.0%
法文学部	37	767	864	61.5%	900	73.3%	902	74.1%
法科	69	525	594	74.1%	614	77.2%	612	77.9%
経済科	24	195	219	68.4%	226	74.6%	228	76.5%
文科	4	47	51	37.2%	60	46.5%	62	57.9%

1) 昭和18年10月に行われる「学徒出陣」を命じられた学生
2) 在学中の学生総数に対するパーセント



東北帝国大学出陣学徒壮行式(河北新報社提供)
1943年10月8日

片平構内にて。総代として答辞を読む寺田泰夫は、1945年(昭和20)4月、沖縄近海での特攻作戦「菊水一号作戦」で先陣をきって出陣し戦死。



宮城野原での 野外演習・壮行式 記事

1943年11月18日 河北新報

宮城野原での壮行式は、東北・北関東地区の大学・高等・専門学校と県内中学生が参加する合同軍事演習の一環としておこなわれた。壮行式には見物の市民・学生もつめかけた。

台湾・朝鮮出身学生の「学徒出陣」

1943年12月当時、日本の植民地支配下にあった朝鮮・台湾では徴兵制が施行されず、代わりに志願兵の制度が施行されていた。

いわゆる「学徒出陣」に際しても、朝鮮・台湾籍の学生には法的な兵役義務はないはずであったが、代わりに「特別志願兵」の勧誘が強力に進められた。勧誘は様々な手段を使って行われ、「志願」とは名ばかりのものであったという。東北帝大の在学生でも同年12月の時点で12名がこの特別志願兵を「志願」し、入隊している。右の写真は朝鮮・台湾学生の志願者取扱に関する文部省の通知(写)(1943年12月3日)



D-1. 出陣学徒に贈られた寄せ書き日章旗 1943年（昭和18） 当館蔵／久禮田俊明氏旧蔵
昭和18年秋のいわゆる学徒出陣に際し、法文学部の教員や学友から寄せ書きしてもらったもの。

D-2. 学生の徴集猶予停止に関する文部省からの電報

1943年（昭和18）9月2日 当館蔵／『教育に関する戦時非常措置関係2』
学生の徴集猶予停止について新聞が先に報じた事を受け、大学や学生の動揺を見越し、「従前通り教授修練を継続し学生の指導につき万全を期せられたき」と指示している。

D-3. 宮城野原壮行会関係における隊列図 1943年（昭和18）11月18日

当館蔵／『昭和十八年度学徒野外連合演習及び出陣学徒壮行式関係』
宮城野原練兵場で行われた学徒野外演習の最後の、閲兵式・分列式の整列図。閲兵式のあと、北軍を戦闘に場内を反時計回りに一周する様子が描かれる。分列式のあと、おそらくそのまま「出陣学徒壮行式」が行われたとみられる。

D-4. 仮卒業証書 1943年（昭和18）11月30日 当館蔵／斎藤敬止氏旧蔵

昭和18年12月に軍隊に入る学生のうち、最高学年に属し一年後の卒業が見込まれる学生に対しては、「仮卒業証書」が発行された。仮卒業証書を授与された学生たちの殆どは、二度と大学に戻ることなく、一年後軍隊に在籍したまま自動的に卒業させられた。

E 出陣・入隊・戦没…

E-0. パネル解説 →次ページ

E-1～5. 入隊を控えた学生の手記 1944年（昭和19）7月頃 当館蔵／中村吉治文書

法文学部経済科の中村吉治教授の授業「経済史」の課題として学生が提出したレポート。経済学に関する専門的なレポートにまじって、入隊前の心境を綴った文章が多く提出され、学生たちの決意や迷いを推し量ることができる。

E-6. 現役兵証書 1943年（昭和18）11月 当館蔵／土倉保資料

学生の徴集猶予停止に伴う昭和18年の臨時徴兵検査で合格し、東部第十四部隊への入隊を命じられたもの。ただし本人は数学科の学生であるため入営延期とされた。

「出陣」する学生たち 出陣・入隊・戦没…

「学徒出陣」直前の教室で —文科女子学生の手紙から—

1943年(昭和18)10月5日

・阿部(次郎)先生の美学の時間がありましたので出してみました。ほんとに大学らしい気持ちになりました。教室がせまくてぎっしりでしたので、ノートなくても良い序論めいたことをおっしゃり、お召しに預かって出て行く人と残る者についてしみじみ、そして熱を持って、はっきりいろいろおっしゃって下さいました。学問と大東亜確立、学問を途中で放棄して出て行く人も、はっきり自分のやっている学問に自信を持って。それが私のはなむけのことばだと強くおっしゃいました。皆しんとして聴いていました。・・・

寿岳章子「東北通信」より(両親宛の手紙から)

入隊の前に —経済科学生のレポート—

1944年(昭和19)7月頃

・下衆の智恵は後からといふ。試験も終る頃になって漸く勉強が面白くなり初めて、ぼぼつとカツセルの原書を辞書を引き引き読出したのは五月の半ばだったろうか。進むにつれて日数が迫って来るのが感ぜられ、遅かった、余りにも遅かった、と後悔の念が起って来た。もう入管まで百日余りしかない今になって漸く勉強が面白くなり、疑問を持つ様になるとは。並べた本を眺め乍ら毎日焦燥を感ずることが多くなった。だが同時に一方では徐々に違ったもって気楽な考えも起って来た。優秀な人々が一生考へ抜いて猶解決のつかないのが学問ではないか。

・結局、入隊も間近い今になって、却って僕は落付いて勉強が出来る。だが過去十ヶ月の間は決して勉強して来たとはいへない。寧ろ僕は一切がこれから初まるのだという様な気持がする。学問にしても、人生にしても。・・・

中村吉治文書 池田重隆「感想」より

海兵団での訓練 —文科学生の軍隊体験—

(海兵団で訓練を一緒に受けるのは)皆学徒。しかも私が入ったときには大学別に構成されていましたが、ですから東北大が大体一つのまとまりになって、それからあとはいろんな、国立大学だったり私立大学だったり。・・・

休憩時間になるとよく私は自分がやってきた専門の話をして、講義をしてやるんですよ。ほかの連中がまじめに聞いてくれたもんだから。「軍隊に来たんだから自分は軍人一本槍だ」というのは嫌いだった。「我々はもともと兵隊になるために成長したじゃない」「いやでもしょうがないから来たんだ」ということは仲間同士でわかり合っていたんでしょね。

(遠藤榮一氏への聞き取りから)

「出陣」の命を受けて —法科学生の日記より—

1943年(昭和18)10月2日

学徒出陣の命下る。(中略)

学徒出陣

出陣悲報伝巷間 寂乎無声於学園

然胸中熱火之華 是日本男子之心

悲報とは自己を悲しむにあらず、国が学徒として心理の道の探求をせしむべからざりしに至りしを悲しむのみ。

涙ながる数行、憂に非ず、悲に非ず、然れば則ち感激の涙なるか。書籍多く積みし机上、ただ悲しむ、法学の道に勤しまれざるを。然れども何処をゆくも同じ、これ皆心理の道。これ皆苦行の道。この道程を進む、これ忠なり。

中村金兵衛「青春の賦—学徒出陣前後—」より

出陣学生・戦没学生

陸・海軍に入った学徒兵は、まずそれぞれの所属部隊で初年兵としての基礎訓練を受けたあと、試験や検査を経て各科に分かれる。兵員としての速成教育を受け、およそ一年弱くらいで実施部隊に配属された。

陸戦要員として前線に送られる者、各地の航空隊で訓練を続け出陣命令を待つ者、内地で軍学校の教官となる者など様々であったが、いずれも戦争末期の最も過酷な状況で軍務につくことになった。いわゆる「特攻隊員」として出陣した学生、前線で生きながらえながら戦後現地で抑留され、帰国前に亡くなった学生もいる。

東北大学の戦没学生総数は、まとまった統計がなく不明である。学籍記録の調査によれば、在学中に戦死した学生として現在80名を確認している。もっともそこには「学徒兵」として出征後、戦地で大学を「卒業」した人は含まれないので、「学徒出陣」者の戦没数は、100名を軽く超えると推測される。

東北帝国大学在学中の戦死者(学生原簿の調査による)

入学年月	理学部	医学部	工学部	法学部
1939年4月				3
1940年4月	1			
1941年4月	2			4
1942年4月				7
1942年10月		1	1	25
1943年10月	1			20
1944年10月				7
1945年4月				8

〔3〕「学徒動員」の実像

F. 通年動員の本格化

F-0. パネル解説→次ページ

F-1. 動員学生の報償金収支簿 1944年(昭和19)~1945年(昭和20)

当館蔵/旧学生部文書『東北帝国大学報国隊会計簿』

勤労働員の学生に対しては、月単位で報償金が支払われることになっていた。もっともそれはいったん大学(報国隊)の口座に収められ、そこから未納の授業料や必要経費が差し引かれた上で支給されていた。

F-2. 教育・研究に関する教官の意見 1944年(昭和19)8月 当館蔵/総務部総務課移管文書

熊谷総長から全学の教授・助教授にむけて行われたアンケートの回答。戦局が逼迫するなかでの大学のあり方について、(1)勤労働員と大学教育のあり方、(2)研究のありかた、(3)大

「学徒動員」の実像 通年動員の本格化

戦局が厳しくなる中、大学に残った学生たちもまた、「学徒」であることを許されなくなっていく。兵器工場などへの年間を通じた勤労動員は1944年(昭和19)春以降またたく間に拡大しやがて授業停止へと至る。「勤労即教育」の名の下に大学から次々と学生たちが工場に送られたが、それは「教育」とはほど遠いものであった。いっぽうで大学自身も「科学動員」と称し、戦時研究の戦力として学生たちを「動員」しはじめていく。



法文学部勤労動員出動壮行式 1944年6月3日
片平構内にて 河北新報社提供



学徒勤労動員に関する学生課の日記 1944年7月～45年9月
動員先工場や文部省と大学の交渉、学徒動員をめぐる諸行事、
学生の出勤状況等を克明に知ることができる。

勤労動員に関する教授たちの意見

各学部での通年動員が本格的にはじまった直後の1944年8月、東北帝大では総長から教授・助教授たちに対して今後の大学のあり方について意見を求めるアンケートが行われた。勤労動員については、勤労動員への教育的配慮を強く求める者もあれば、逆に大学教育を一時停止し勤労動員に専念すべし、というものもある。いずれも「勤労即教育」という建前に否定的である点では、多くの教授たちが同じ意見である。(引用文は一部を抜粋・要約したものです)

動員もしくは勤労は即ち学修だとよくいいます。しかし学問とすることをかく安易に見ることは不賛成です。勤労を学修と見て、授業料を取り、その授業をせずしてこれを徴収する不合理をごまかすために受入側の報償金経理をもって縫合する、かかる策は拙を極めたものと言わなければなりません。

(法文学部法科N教授)

従来は行学一致の美辞に惑わされて、学生の信念に動揺を認められた。よってむしろこの際、一元的に勤労動員に徹するを必要と認める。

(工学部化学N教授)

勤労の実際を見ますとき、考慮の余地が多分に存すると思います。即ちある場合は適当な仕事がないために無為に時間を空費している場合、或いは仕事が学徒に対して極めて不適当なるために学生の興味を全然失って目的を達していない場合などである。

(工学部機械S助教授)

工場などに於いては案外工具は暇であり、かつ、有能ならざる者が技術的指導の立場にあるにもかかわらず、学生のゆえを以て単なる一般の勤労に従事している。学徒動員は出来るだけ知能動員たるべき事。学生の能力を生かして用いるべきである。

(理学部化学F教授)

学運営・体制のありかた、以上の三つについて、教官たちがそれぞれの意見を開陳している。展示中の資料は阿部次郎法文学部教授の(3)に関する意見。総長に対して「思いつきによって動くな、思いつきの進言によりて動かされるな」と忠告し「必要とあらば直接お目にかかることを嫌わず」と述べている。

F-3. 「学徒勤労の歌」楽譜 作詞・作曲：東京音楽学校

1944年(昭和19)11月頃 当館蔵／小西保旧蔵 学生課文書『学徒動員部 日記』

G. 文系学生の「動員」

G-0. パネル解説

「学徒動員」の実像

文系学生の「動員」

文系学生の動員

1944年(昭和19)春以降本格化する「通年動員」のあり方は、理科系、医学系、文科系でそれぞれ形を異にした。文系学生は学年単位での集団動員を基本としたが、東北帝国大学では仙台市苦竹に所在した陸軍造兵廠(現陸上自衛隊苦竹駐屯地内)、群馬県伊勢崎の中島飛行機伊勢崎工場への動員、県内北部への農業支援などに動員された。動員される学生は当初三年生だけだったが、1945年(昭和20)に入ると全学年が動員されるようになり、法文学部の教育活動は事実上停止に追い込まれた。



陸軍造兵廠に動員された法文学部生の退所記念写真(1945年6月)

法文学部学生の動員先

入学年月	動員先	動員期間
昭和17年 4月 入学者	陸軍東京第一造兵廠仙台製造所(仙台市苦竹)	1944. 6~9
昭和17年10月 入学者	陸軍東京第一造兵廠仙台製造所(仙台市苦竹)	1944.10~1945.8
昭和18年10月 入学者	陸軍東京第一造兵廠仙台製造所(仙台市苦竹)	1945. 1~1945.8
昭和19年10月 入学者	中島飛行機小泉製作所伊勢崎分工場(群馬県伊勢崎市)	1945. 1~1945.8
昭和20年 4月 入学者	古川地区への援農(宮城県大崎市)	1945. 5~8

原町造兵廠に動員中の学生の手紙

1945年2月私の仕事は学徒管理(工務掛にきている学徒五十六名の)です。今までこの仕事は眠っていました。私は大いに活動しています。大学から国民学校まで少しずつですが各階級の学校が全部来ています。帝大は私たち二名、東北学院高商が九名、東北中学(現東北高校)が二十二名、国民学校高等科二年が三十三名。・・・

・・・私がいつも忙しくてきりぎりまいですのに、Mさんとこはとでもひまでして一月の中五、六日忙しいきりで、後は閑閑寂々、好き放題本を読みりポートをかいています。時々うらやましくなります。

(寿岳章子『東北通信』)

大学と工場・軍隊のはざままで—法文学部伊勢崎隊—

1944年10月に入学した法文学部の学生の多くは、3ヶ月間だけ大学生活を送ったあと、群馬県伊勢崎の中島飛行機伊勢崎工場に動員された。航空機増産のため1945年3月までの緊急動員という約束であったが、実際には終戦まで動員が続いた。

飛行機工場が集中する群馬・栃木には現地や東京のほか東北諸県の諸学校からも多くの学生生徒が動員され、仙台からも東北帝大のほか東北学院、旧制二高、仙台工業専門学校、宮城師範学校、宮城県女子専門学校などの学徒が動員された。東北帝大の学生は主として部品の発注や検査、経理や労務管理等を担当したが、現場では資材不足のため思ったほど仕事が無く、多忙な職場への配置転換を望む学生もいた。

せっかく入学した大学から遠く離れた地で、工場という全く異なる場で日常生活を送る学生たちは、大学が交替で派遣する教官の指揮下で何とか「学徒」という体裁を保っていた。しかし本土決戦が現実味を帯びてくる中、軍の管下で地域の動員学徒等を学校の枠を越えた生産・防衛力として結集しようという「皇国学徒隊」結成の動きも生じ、東北帝大の動員学生はそのとりまとめ役を期待された。もっともそれが現実となるより前に、戦争の方が早く終結をむかえたが。

派遣教官が見た伊勢崎動員学生の状況

1945年3月・・・ありていに申さば、大学を離れた学徒は、そこに新たなる生活の意義を見いだすべき工場から、再び裏切られているといえる。学徒は国家の命令に従って工場に送られてきたのであるが、工場自体は過剰の人員を擁して、学徒動員の緊急性は完全に骨抜きにされている。工場から裏切られた学徒は、かくて再び、大学に生活の支柱を求めようとする。しかも、大学と学徒との距離はいよいよ増大してゆくように見える。

(石崎政一郎文書：伊勢崎隊報告(一))

G-1. 伊勢崎動員学生の学生委員報告書(文化部)

1945年(昭和20)3月 当館蔵/石崎政一郎文書

伊勢崎への動員学生は、生活・勤労・文化の三つの学生委員を設け、学生の状況とともに意見・要望などをこれらの委員を介して教官に伝えることにしていた。文化部の報告書では、学生が希望する図書を派遣教官に持参してもらうこと、学術的な講演会の実現に協力を仰ぎたいこと、音楽会開催が工場側の不認識で実現できなかったことなどを記す。生活部委員はクリーニング店との交渉や新聞の配給、夜食の確保などについて記している。

G-2. 軍部主導による伊勢崎地区での「皇国学徒隊」編成の動きについて、担当教授に対応を相談する学生の手紙

1945年（昭和20）6月 当館蔵／石崎政一郎文書

伊勢崎地区動員中の諸学校による「学徒隊」（皇国学徒隊）の編成について対応を相談する女子学生の手紙。伊勢崎の皇国学徒隊は6月3日に結成式が行われたが、大学側はこうした動きを軍による学生・生徒そのものの直接管理、直接動員を目的とした措置として警戒し、学生たちにも慎重な対応を求めている。

G-3. 春樹集（法文学部動員学生の回覧文集）

1945年（昭和20） 当館蔵

仙台市苦竹の陸軍造兵廠に2・3年生が、伊勢崎の中島飛行機工場に1年生が動員されている状況下で、両所の学生たちの間で回覧筆記された文集。動員中の近況を記す者、詩作や文芸作品を書き記す者など様々である。

G-4. 志田村への援農動員先で掲げられた「東北帝国大学学徒隊」看板

1945年（昭和20） 当館蔵／加藤晴彦氏旧蔵

法文学部一年生（1945年4月入学）の志田村（現大崎市内）への援農動員に際し、動員先の事務所（荒田目神社境内）に掲げられた看板。「学徒隊」は1945年5月の「戦時教育令」により結成された組織で、学校ごとに結成されるとともに動員先ごとに小隊が編成された。従来 of 報国隊同様動員や訓練の組織であるが、本土決戦となった場合は国民義勇隊とともに戦闘部隊となることも想定されていた。

H. 理工系学生の「動員」

H-0. パネル解説→次ページ

H-1. 動員先から学生課に宛てた理工系学生たちの手紙

1945年（昭和20） 当館蔵／小西保旧蔵 学生課文書『動員学徒からの書簡』

動員先への到着の挨拶、学生新聞やその他の差し入れへの御礼、「科学動員」による動員解除命令への返答、終戦に伴う復学に際しての懸念事項の確認など、遠隔地に動員された学生たちの状況を知ることが出来る。

H-2. 理学部学生の動員予定工場と大学の協議記録

1945年（昭和20）2月 当館蔵／小西保旧蔵 学生課文書『学徒動員部 日誌』

文部省から指示された動員先の企業と大学との間での協議状況を記す。化学教室は東北金属・不二越鋼材との協議が難航し、また地質学科と小野田セメントの協議は成立せず動員見合わせとなった旨が記されている。動員の具体的な条件などは大学と企業等の直接交渉で決まる部分もあり、協議が整わない場合は動員が中止されることもあった。

H-3. 生物学科学生の「科学研究要員」申請書（写）

1944年（昭和19）9月 当館蔵／生物学教室寄贈資料『学徒動員』

理学部生物学科の2・3年生10名を、生物学科の「科学研究要員」として勤労働員から除外する申請書（学生課に提出した文書の写し）。教授たちが抱える科学研究費や軍の委託研究などに「動員」することになっている。

「学徒動員」の実態 理工系学生の「動員」

理工系学生の勤労動員

理工系学生の勤労動員は、専門分野を活かすことが建前とされた。このうち医学生は大学病院などへの集団動員を基本としたが、理・工学部学生の動員は、工場側の需要に応じて数名単位で分散的におこなわれがちで、遠隔地の工場に動員されるケースも少なくなかった。応召した技術者の代役を期待された彼らだが、戦局の悪化による資材不足・燃料不足のなか、現実に出ることは限られていたという。

陸軍・海軍の委託学生として、同級生たちと別に軍関係の施設に動員される学生も少なくない。委託学生はもとも将来の技術将校を確保するため奨学制度だが、勤労動員の本格化に伴い、優秀な学生を軍が直接動員する手段として活用されたのである。

理・工学部各学科(教室)の主な動員先 (学内動員を除く。○は10人程度以上の集団動員)

学部	学科	動員先	動員都道府県
工学部	通信工学科	東北川崎工場	神奈川県
		国際電気通信	東京都
		第二海軍技術隊(電波研究所)	東京都
		常陸川崎工場	群馬県
	電気工学科	陸軍多摩技術研究所	東京都
		陸軍多摩技術研究所仙台分室	○ 工部市内(→大石町)
		日本無線三浦工場	東京都
		国際電気通信	東京都
		常陸川崎工場	群馬県
		愛知材料工場	愛知県
		日立製作所多賀工場	○ 茨城県
		日立製作所日立工場	○ 茨城県
		日立製作所亀戸工場	○ 東京都
		日立製作所横浜工場	○ 神奈川県
	機械工学科	中島飛行機宇都宮製作所	○ 栃木県
		日立製作所水戸工場	茨城県
		不二越富山工場	富山県
		日立富山工場	富山県
		新潟川崎工場	新潟県
		加藤製作所	千葉県
多賀地海軍工廠		茨城県	
海軍技術研究所(電波研究所)		東京都	
第一海軍工廠(松岡)		宮城県	
第二海軍工廠		茨城県	
第一海軍技術隊支隊		神奈川県	
中島飛行機大宮製作所		埼玉県	
川崎航空機製作所		長野県	
川崎航空機製作所		富山県	
保土谷化学工業富山工場		富山県	
金属工学科		羽田精機電機・精工工場	茨城県
	日立製作所日立工場	茨城県	
	日立製作所日立工場	茨城県	
	日立製作所日立工場	茨城県	
	日立製作所日立工場	茨城県	
	日立製作所日立工場	茨城県	
	日立製作所日立工場	茨城県	
	日立製作所日立工場	茨城県	
	日立製作所日立工場	茨城県	
	日立製作所日立工場	茨城県	
航空工学科	中島飛行機小島製作所	○ 群馬県	
	日立製作所亀戸工場	東京都	
	中島飛行機大宮製作所	○ 埼玉県	
	中島飛行機宇都宮製作所	○ 栃木県	
	第一海軍航空隊	○ 茨城県	
	保土谷化学工業富山工場	富山県	
化学工学科	東京理科大学北海通工場	北海道	
	日立化学水戸工場	群馬県	
	中島飛行機小島製作所	○ 群馬県	
	中島飛行機大宮製作所	○ 埼玉県	
理学部	数学科	中島飛行機大宮製作所	○ 埼玉県
		中島飛行機宇都宮製作所	○ 栃木県
	物理学科	北洋電気	東京都
		東京工業大学研究所	茨城県
		海軍工廠	広島県
	化学科	佐田化学工業	長崎県
		日本化学工業富山工場	富山県
		東京理科大学北海通工場	北海道
	地質学科(地質・岩石)	日本電気・本工工場	○ 群馬県
		常陸川崎工場	茨城県
陸軍燃料部		東京都	
住友金属工業玉川内製錬所		神奈川県	

理学部化学科学生の回想 (日本曹達二本木工場への動員)

S君と私は、コンデンサー用絶縁油の合成を担当した。海軍からの委託研究であった。

・ ・ ・ ところが待てども待てども(合成に必要な)発煙硫酸を回してくれない。詳細な説明書を添付して再度申請書を提出した。すると程なく、海軍管理官室へ出頭するようにという達しがあった。期待に胸を膨らませ説明用資料を携えて二人で出かけた。本部の奥まった一室には、いかめしい海軍大佐の制服に身を固めた管理官殿がおられた。

「君達の尽忠報国の精神と旺盛な研究意欲は誠に多とするところである。しかしながら現下の情勢では遺憾ながら発煙硫酸は支給できない。別な方法を工夫してやって欲しい。」

「でも・・・」

「解つてる。説明はいらない。無いものは無いのであるからして、是非大和魂で合成してくれたまえ。」

すずすずと引き上げざるを得なかった。

(塩浜喬「学徒動員と私達」より)

中島飛行機太田製作所動員中の学生 (1945年2月工学部航空学科) と工場

中島飛行機太田製作所および小泉製作所には、工学部機械・航空学科や理学部数学科の学生が動員。仙台からは、ほかに二高や東北学院などからも集団で動員されている。右下は太田製作所での「単」製作の様子 (『富士重工業50年史』より)



学内動員

学生のなかには、研究補助員などとして学内に動員される者もいた。戦時下に強化された科学研究費の研究遂行のため、ひいては将来有望な学生を大学にとどめ置くため、教授たちもこの制度を活用した。

この傾向は、戦争末期になるほど強まるようになる。その中には、工場での仕事がない、という理由で動員先から引き上げ、学内での動員に切り替えている例もある。「科学動員」が声高に叫ばれるのは、こうした末期的な状況の中においてであった。



工学部機械工学科研究室に動員中の工学部生 (酒井高男名誉教授提供)

I. 大学院学生と「科学動員」

I-0. パネル解説→次ページ

I-1. 特別研究生の研究事項解説書 当館蔵/入試課移管『大学院特別研究生綴昭和19年度』

I-2. 特別研究生の辞令 個人蔵/酒井高男名誉教授 昭和19年

I-3. 指導教官の研究題目調 当館蔵/総務課移管『帝国大学総長会議関係書類』昭和19年

工学部航空学科を卒業した酒井は、大学院特別研究生として「小形歯車の研究」というテーマで研究を行う予定であった。しかし、東北帝国大学から酒井に出された特別研究生の辞令には「無雑音歯車の研究」と異なるテーマが書かれていた。実はこの「無雑音歯車の研究」は指導教官の成瀬政男が、陸軍省から委託を受けた軍事研究のテーマ「無雑音歯車の研究(主として手回電気用)」そのものなのであった。陸軍は前線で用いる無線機の電源として、騒音の出ない手回し発電機の開発を求めているのである。

「学徒動員」の実像 大学院学生と「科学動員」

大学院特別研究生制度

大学院学生も学部学生の例にもれず応召・入営のために休学をせざるをえず、研究に従事することは困難となったが、その中でもやや特殊な位置にいたのが特別研究生である。特別研究生とは1943年(昭和18)に優秀な研究者・技術者を養成することを目的として帝国大学を中心に置かれたもので、徴兵猶予・学資給付という特典があった。東北帝国大学では1943年については法文・理・医・工の各学部から、1944年(昭和19)からは法文を除く理・医・工の各学部から選抜された学生が特別研究生となった。

研究者養成という目的とは裏腹に、大学が特別研究生に期待したのは、大学の科学研究の人手不足、特に教員たちの研究補助者の不足を補うことであった。教員たちは陸海軍から様々な研究を委託されており、また文部省の研究班に所属して科学研究を推進していた。特別研究生は研究には従事できたものの、自分の望む研究ではなく、指導教官の研究の補助をするという役割を果たすことを求められたのである。大学院学生はいわば「科学動員」に参画することを余儀なくされたのであった。



1944年(昭和19)6月ごろ宮城県女子専門学校の学生が泉信一理学部教授の陸軍依託研究への勤労動員(手動計算機による数値計算)に来た際の写真。●が泉、▼が1943年大学院特別研究生となった内藤忠男。当時学生の鶴丸孝司(★)・土倉保(◆)もこの特別研究生となる。

大学院特別研究生の学部別構成

入学年月	理学部	医学部	工学部	法文学部	合計
1943年10月	12	9	7	13	41
1944年10月	13	6	12	—	31
1945年10月	11	9	8	—	28
合計	36	24	27	13	100

大学院特別研究生の回想 ※回想は一部を抜粋・要約したものです

卒業ゼミ、大学院の時代と直接先生に御指導頂いたのですが、昭和19年の終り頃だったでしょうか、先生は参謀本部の囑託を引き受られて、それ以来先生と数学そのものを対象にお話することは極端にすくなくなったように覚えています(理学部)

見習医官として海軍に入隊したが、上官から「貴官は大学院特別研究生になったから帰って勉強せよ、ニューヨーク占領の時おおう」と言われ、東北大に戻った。その他の者は大学に残る私に医学の研究進歩を託し戦死を覚悟し入隊した(医学部)

先生は特別研究生として何をやりたいかを聞かれた。私が希望を言うと先生は「それはちょうどよかった。航空計器をやり給え」…私の希望がほかの何であろうとも「それはちょうどよかった。航空計器をやり給え」となったに違いない(工学部)

指導教官から特別研究生になるようにとの御通告を受けた。勉強のために残されたのですが、実際は軍需工場や食糧増産などに動員されている学生たちとの連絡係・世話役のようなことが大部分の勤務でした(法文学部)

文部省科学研究補助技術員養成所

大学などの研究機関は特別研究生のような研究に特化した補助者だけではなく、技術に特化した補助者をも必要としていた。文部省は全国の官立大学に科学研究補助技術員養成所を設け、中等学校卒業者を中心に短期間の養成をおこなひ、養成した技術員を大学や軍の研究施設に供給することを計画した。東北帝国大学ではまず第1回仙台養成所として金属材料研究所に金属材料学科、理学部に硝子加工科、科学計測研究所に工學器械学科を設置し、1944年10月1日より6か月間の養成を行い、第2回東北帝国大学養成所では、工学部航空学科に航空機械科、電気通信研究所に電気通信科、選鉱製錬研究所に選鉱製錬科、医学部附属病院にエックス線科が置かれ、1945年(昭和20)1月20日より養成がおこなわれた。養成所の卒業生は、東北帝国大学内の研究所や陸海軍の軍事施設に配分された。養成に際して大学院学生が教授らとともに養成所講師を委嘱されることもあった。

I-4. 文部省科学研究補助技術員養成所 第二回養成所生徒総代の入学宣誓書・卒業式答辞

1945年(昭和20)1月30日・6月30日 当館蔵/入試課移管文書『庶務教務関係』

福島県立安達中学校から選鉱製錬科に入学した生徒総代・箱崎総一の入学宣誓書と、山形高等学校理科助手から委託生として入学し、電気通信科を卒業した卒業生一同総代・磯崎光正の答辞。のちに箱崎は岩手医専・新潟大学医学部を経て精神科医、磯崎は山形大学附属図書館事務長となる。養成所卒業生のほとんどは戦後失職したとみられるが、文部省の指定した就職先で引き続き勤務する者もわずかながら存在したようである。

I-5. 研究所内耕地の共同耕作に関する告示(複製)

1945年(昭和20)4月 当館蔵/科学計測研究所移管文書『所内耕地共同耕作関係』

仙台市郊外の三条町にあった科学計測研究所では、食糧難に備えて所長以下職員総出の農耕班を設け、1945年3月に完成したばかりの研究所敷地を用いて耕作が開始された。しかしアメ

リカ軍のB29の侵入が増加してくると6月、新たに防空当番班が編成され、夜通し泊まり込みの警戒が行われることとなった。食糧問題が改善の兆しを見せぬまま、東北帝国大学は運命の7月10日を迎えることとなる。

【第2企画展示室】

〔1〕 仙台空襲

J・K 仙台空襲

J-1. 仙台空襲前の航空写真（国土地理院提供写真に加筆） 1945年（昭和20）5月25日

アメリカ軍の写真偵察機F13が攻撃目標であった仙台の市街地を撮影した写真のうち、片平の東北帝国大学の姿をおさめたもの。現在東北大学の川内キャンパスがある場所は、戦前においては陸軍第二師団の司令部が置かれ、周辺には造兵廠などの軍事施設がひしめいていた。また当時評定河原には仙台市の動物園があったが、空襲による逃走が危惧されてライオンなどの猛獣類は1944年に銃殺された。



J-2. 仙台空襲後の航空写真（国土地理院提供写真に加筆） 1946年（昭和21）6月16日

アメリカ軍は新伝馬町（クリスロード）と東三番丁の交差点を爆撃中心点と定め、この点を中心とする半径1.2キロメートルの円（確率誤差円）に投下する焼夷弾が半分でも着弾すれば、この市街地を壊滅できると考え、焼夷弾の投下をおこなった。東北帝国大学は、円の内部にある片平地区が被災したが、円の外にあった星陵地区の医学部・附属医院は屋上に赤十字を掲げたこともあってか被弾をまぬがれた。川内地区の軍関係施設は集中的に焼夷弾が投下され火の海と化した。写真からは追廻練兵場には空襲で被災した市民の仮設住宅が建設されていることがわかる。



K-0. 仙台空襲 (解説パネル)

仙台空襲

1945年(昭和20)7月10日未明、アメリカ軍のB-29爆撃機が仙台に侵入、焼夷弾による爆撃を2時間あまり敢行した。仙台が空襲の標的となったのは、大学の所在地であり、かつ造兵廠などの軍事施設が存在するなど、戦略的に重要であると判断されたからであった。東北帝国大学も空襲の標的となり、理学部・工学部・法文学部・金属材料研究所・高速力学研究所など片平地区に存在した建物の約40パーセントが焼失した。星陵地区の医学部は幸い被災を免れたが、附属病院は空襲による負傷者・死者であふれかえった。東北大生も8名が犠牲となった。



物理学教室が入っていた理学部本館は瓦屋根を貫通してきた焼夷弾で焼失。薄っぺらなレンガの壁だけが残る廃墟となった(理学部物理学科)

仙台空襲の被災状況と学生の回想

※回想は一部を抜粋し要約したものです





東京大空襲の経験があったため、着弾した大学本部を消火するよりは食料を確保するのが先決と判断し、焼失する前に金属材料研究所隣の学生食堂に入り、持てるだけの食料品を持って化学教室地下室に避難していた人たちに分配した(理学部化学科)

病院は火傷患者であふれていた。そして多くの人の死に直面した。腹部から足まで炭化した人もいた。混乱の最中、同級生が先輩たちに担架で運ばれてきたが、重傷で何もできないまま亡くなってしまった(医学部)



化学工学科の木造建物は全焼したが、非水溶液化学研究所の建設中の木造建物は、職員学生の献身的努力により延焼をまねかれた(工学部化学工学科)



文科研究棟の3階がブスブスいぶっていた。何人か集まった先生や学生たちがリレー式に研究室の本を運び出した。消火活動の賞状と共にもらったノートはありがたかったが、質の悪い紙でインクがやたらにじんで困った(法文学部)

完成した後の風洞が破壊されて無残な姿をさらしていた。40年以上経た今日でもまぶたに焼き付いている(工学部航空学科)



裏門の外の木造長屋群に焼夷弾が2、3発命中し、長屋の住民が救助を求めて避難してきたので、とっさの判断で機械工学科の地下実験室に避難させた。高速力学研究所の木造部分は長屋の火が大学の塙越しに飛び火して10分たらずで燃えてしまった(工学部機械工学科)

K-1. 行方不明学生の安否を問う学生課の掲示

1945年(昭和20)7月18日 当館蔵/学生課移管文書『雑件(昭和二十年以降)』

仙台空襲により所在不明になった法文学部学生の安否をたずねる学生課長の告示。ほかに空襲で死亡した学生の氏名を伝える掲示や、罹災学生の避難先を知りたいものは申し出る旨、また罹災学生で居住に困却している者は学生課第三室に申し出る旨の課長告示が相次いで掲示された。ちなみに当該学生はのちに生存が確認され、1945年9月に無事卒業した。

K-2. 仙台空襲による罹災死亡学生調

1945年(昭和20) 当館蔵/学生課移管文書『雑件(昭和二十年以降)』

学生課の調べによる、仙台空襲で亡くなった学生についての調書。理学部数学科1年・医学部1年・同2年・同3年・工学部航空学科1年・同化学工学科1年・医学専門部1年・仙台臨

時教員養成所2年の8名の死亡した状況について書かれている。いずれの学生も下宿先が国分町・東二番丁・北二番丁など、空襲の激しかった市街地に位置していた。

K-3. 空襲時の消火活動の功績を称える総長からの表彰状と学生の功績調書

1945年（昭和20）～1946年（昭和21） 当館蔵／東北大学百年史編纂室収集資料・学生課移管『雑件』

空襲当時工学部金属工学科の助手であった高橋が、空襲警報を聞きつけて同僚と数発の焼夷弾の消火にあたった功績により熊谷総長から授与された賞状。この賞状とともに当時貴重であったゴム長靴が賞品として与えられた。遅れること1946年（昭和21）3月31日、同じく消火に奮闘した学生243名に対しても総長から表彰状が授与されたが、賞品として与えられたのは学用ノート1冊であった。大学は表彰に先駆け、各学部功績のあった学生を「甲」「乙」に分けて取り調べるよう命じている。

〔3〕学生たちの「戦後」

L. 敗戦直後の学生生活

L-0. パネル解説

学生たちの「戦後」 敗戦直後の学生生活

1945年（昭和20）8月15日、職員・学生が各学部・研究所に集まり玉音放送を聞き、敗戦を迎えた。9月、新学期が始まると共に、法文学部の教授らが被災した法文学部教室にて盛大な講演会を開催し好評を博した。戦後順風満帆に舵を切ったにみえる東北大生も、食糧難、住居不足、復員など、さまざまな波にさらされることとなる。

食糧難

敗戦後の物価上昇に加え、未曾有の食料不足により、学生は生きていくために勉強よりも「食糧確保第一」とならざるを得なかった。生活難により休退学する者や、アルバイトにより生計をたてる者もあった。食糧確保の買出しのために授業を欠席する者も多く見られた。

東北大生 1000人の生活実態調査（1946年6月）

生活上の理由により休退学せし者	48名	4.8%
極度に困窮し休退学を余儀なくせられんとする者	67名	6.7%
内職によりかろうじて生活している者	50名	5.0%
現在生活してゐるが今後の状況の変化によりどうなるかわからぬ者（進駐軍労働者を含む）	475名	47.5%
ほとんど困っていない者	360名	36.0%
買出しの為欠席を余儀なくされる者	840名	84%
買出しの必要な者	160名	16%
一か月に要する学費	300円乃至800円程度（主として主食代）	

住宅事情

仙台空襲によって、下宿先を焼け出された学生が多くあった。大学は当初本部事務室に戦災学生を一時住まわせ、1945年11月には松風寮（東京第一陸軍造兵廠仙台製造所工具宿舎を入手）・露風寮（旧制二高の明善寮の建物を借用）などの学生寮を整備するなどしたが、学生や職員が自主的に学生寮を設ける動きもみられた。一方で、農村部に移住して列車通学をする学生も増加したが、燃料の石炭不足で通学が困難となると、授業期間を短縮せねばならなくなった。

復員軍人の入学

敗戦後、学徒動員の廃止、ならびに復員による復学により、学生のいなかった学園にようやく東北大生が戻ってきた。しかし一方で、戦後新しく入学した東北大生は、今までにない顔ぶれであった。学科試験が免除されたうえ、居住地最寄りの学校を選ぶことができた陸海軍直轄学校の復員者や、また外地の廃校となった大学の学生が、戦地から帰還するや否や東北帝国大学に殺到したのである。

学生の回想 ※回想は一部を抜粋・要約したものです

学生・職員の中には住む家のない者が多く、安積宏先生が理学部からベッドを借用し大会議室を宿泊所として提供し、「舎宿（セイミ）寮」として自らが世帯主となり食料品の配給を受けた。実験室が炊事場と化し、大学の正門の方から東一番丁の通りに入ったすぐ右手にあった闇市によく買い物に出かけた。野菜や魚を仕入れ、研究室で料理をしたが、魚の焼ける匂いが教室に入って鼻を刺した（理学部化学科）



舎宿の様子 1948年2月10日 河北新報

当時、配給を受けるためには世帯に所属する必要があったため、宿所はあっても食事つきではない学生・寝る部屋もない学生が架空の「せみたけ寮」を作り、大学院特別研究生が「寮長」となって米やタバコなど配給を受けた。寝る部屋のない学生は教室に寝泊まりし、研究室で自炊している教員もいた（理学部生物学科）

北四番丁の学生寮「航空寮」では食糧難の折柄、寮生の移動を利用して幽霊人口を作断した。寮生が卒業しても留年した体にして1人当たり2倍近い配給を受けることに成功した。1946年5～6月に寮がアメリカ第8軍団少佐の居宅用に徴発されるまで恩恵に浴した

（工学部航空学科→工業力学科）

新学期の開始に備え、学生の住居を考える必要があり、仙台空襲で延焼を防いだ非水溶液化学研究所の建物を造成し1946年9月ごろまで1年間、寮がわりに使用した（工学部化学工学科）

終戦により陸軍士官学校生として復員した。復員軍人の再教育講習会で阿部次郎・山川丙三郎・林竹二ら諸先生が、軍人としての教育を受けてきた私に新しい考え方の扉を開いてくれた。入学試験にあたって忘れられないのは、他の大学が職業軍人の入学者を制限する動きを示す中で、東北大学の法文学部の入学者中には10%以上の職業軍人が居たことだ。東北大学はむしろ、職業軍人の民主的再教育こそ大切であると考えていたのではなからうか（法文学部）

1945年の秋から1947年にかけては、学業半ばで京城帝大と満洲医大から引揚げてきた14名が転入学して共に学ぶことになり、ある人からは波瀾万丈の引揚げ物語を聞かされたこともある（医学部）

L-1. 学校農園関係資料（さつまいも苗の配布）

1946年（昭和21） 当館蔵／学生課移管文書『昭和二十一年五月以降 種苗二関スル綴』

食糧難の折柄、大学は学校の敷地を農園にするという「学校農園」設置に着手した。職員や学生に本部前や銃器庫前の大学敷地を開放し、野菜の種苗や農機具を貸与し、食料を自給させるなどした。学校農園の実施にあたり、事務局学生部は北海道帝国大学や宮城県農業会などに依頼し、かぼちゃ・さつまいも・小麦・じゃがいもの種苗を集め、学生寮単位で配付している。理学部化学科の学生寮「舎密寮」の名も見える。

L-2. 平井越郎日記

1945年（昭和20）8月～1946年（昭和21）12月 当館蔵／中川正人収集資料

平井は当時理学部生物学科の助手。研究を休んで買出しに行ったこと、生物学教室に互助会ができて薪炭や食料品を市価より安く配給したこと、食糧難により夏季休業が延長になったこと、兵学校出身の復員者が医学部を受験したことなど、空襲・敗戦後の学園の様子を生々しく伝えている。

L-3. 軍関係学校からの入学生の就学状況報告

1946年（昭和21）11月25日 当館蔵／法学部移管文書『年報諸表綴（諸統計表綴）』

法文学部では1946年の入学志願者297名（定員200名）のうち、約3分の1が軍関係学校からの復員者であり、実際に入学したのは88名であった。一般に高等学校卒業者が入学者の多くを占める大学にあって、彼らの存在は学生の質の低下という観点から問題視されていた。展示史料は、その点を東北大が文部省に報告したものであるが、法文学部としては、彼らが基礎知識や教養を欠き「思想的ニモ学問的ニモ新ニ出発スベキトコロガ少クナイ」ものの、素直で真面目な者が多いので適切に指導すれば伸びる見込みもあるとしている。

M. 学生文化・スポーツ活動の再開

M-0. パネル解説（2点）→次・次々ページ

M-1. 東北帝国大学学友会会則／同草稿二点 1946年（昭和21）

当館蔵／学生課移管文書『雑件（昭和二十年以降）』

戦後、全学学友会を結成するにあたり作成された会則。手書きの草稿にさまざまな添削が加えられ、タイプライターで打たれた「学友会会則」にまとめられている。当初、生活部と新聞部の委員4名が起草し、添削を加え清書された後に議論があり、会の目的（第二条）を明記していった推敲の過程が窺える。

M-2. 学友会音楽部の復興予算申請 1947年（昭和22）3月15日

当館蔵／学生課移管文書『文化部諸綴』

音楽部長の米澤治文（法文学部・助教授）から学生部長に提出された書類。「長期間の閉鎖により諸楽器の破損甚だし」として、楽器購入等の予算を申請している。フルート千円、ホルン三千円、チェロ二千五百円など、当時の物価も窺い知ることが出来る。音楽部は、学友会文化部の中でも一桁大きい予算を獲得していた。

M-3. 山の会会報 復刊第1号 1951年（昭和26）11月 当館蔵／山岳部・山の会旧蔵文書

学制改革にともない、東北帝国大学第二高等学校の山岳部が合同して、「東北大学山の会」と

学生たちの「戦後」 学生文化・スポーツ活動の再開

1945年(昭和20)8月の敗戦時、仙台の中心街は空襲で焼失し、東北帝国大学の片平キャンパスも、いくつもの建物が被害をうけた。教授も学生も被災者で、命が助かった者も明日の生活に追われていた。そうした中でも、あるいはそうした中だからこそ、立場や所属にとらわれず、学校の枠をも越えた助け合いが広がった。生協や文化部、運動部などに至るまで、戦後の各種の学生生活活動が、自治の雰囲気の中で生まれていった。

早い例では1946年(昭和21)2月、「在外父兄救出仙台学生同盟」のテントが、仙台駅前の焼跡広場に張られた。海外から引き揚げて市内の学校に転入学し、外地に父母のいる学生とその仲間たちが、日夜ここで引揚者の世話にあたった。この奉仕活動の費用や、困窮する学生の学費・生活費獲得のため、音楽会や演劇公演の企画などが立てられた。東北大学学友会演劇部の戦後初公演「アルト・ハイデルベルク」は、引揚者援護資金1万5千円の獲得という目的を掲げ、新聞部や学生組合プリント部も連携した活動を行ったことが知られている。

学生文化・スポーツ活動の再開—さまざまな枠を超えて—

1941年(昭和16)4月に「東北帝国大学報国会」が成立し、その下部組織の「鍛錬部」が運動系団体、「教養部」が文化系団体を包含した時代があった。軍国主義の時代が終わり、1946年5月に全学の学友会(教職員と学生の親睦団体)が再結成された際に、文化部や体育部などが編成され、新たな歩みを始めた。学友会の会則によれば、その目的は「会員の相互練磨によって文化の向上、体育の増進ならびに生活の改善を図り、本学学風の振興に資する」、構成員は「本学職員及び学生生徒の全員」とある。

一方で、学校の枠を超えた活動もスタートした。東北学生新聞は、東北大学に限定せず、東北地方の高等教育機関のニュースを集め、仙台以外でも多くの読者を獲得した。漕艇部や山岳部は、見るべき運動部の乏しかった東北帝国大学に、新たな伝統を樹立した。各学部が各々独立する傾向が強かった戦前に比べ、新たな学友会は全学一体の活動の場を作り出していった。



学園にも襲う食料危機
(1946年6月20日 東北学生新聞)

戦後初期の主要学生団体一覧(1945～47年)

名称	設立	指導教官など	備考
陸上競技部	1946年 10月 1日	長谷田善三(法文・教授)	
野球部	〃	三枝彦雄(理・教授)	
庭球部	〃	中川善之助(法文・教授)	
卓球部	〃	瀬戸八郎(医・教授)	
水泳部	〃	中村吉治(法文・教授)	
ラケット部	〃	武藤宗雄(医・教授)	
蹴球部	〃	松田幸次郎(医・教授)	
排球部	〃	梅澤良之(工・助教授)	戦後新たに発足
籃球部	〃	新澤健三郎(医・教授)	
乗船部	〃	武藤宗雄(医・教授)	
ヨット部	〃	植原弘毅(工・教授)	
スキー部	〃	中村左衛門太郎(理・教授)	
山岳部	〃	中村左衛門太郎(理・教授)	戦後新たに発足
スケート部	〃	三枝彦雄(理・教授)	
養蜂部	〃	富永齊(理・教授)	
体操部	〃	〃	1948年以降見えなくなる
演劇部	〃	清宮四郎(法文・教授)	
図書部	〃	木村亀二(法文・教授)	
音楽部	〃	米沢治文(法文・助教授)	
文芸部	〃	桑原武夫(法文・助教授)	
美術部	〃	村田潔(法文・助教授)	
映画部	〃	浜中忠郎(理・教授)	
演劇部	〃	村田潔(法文・助教授)	戦後新たに発足
宗教部	〃	金身内照(法文・教授)	戦後新たに発足
放送部	〃	鈴木隆三(工・教授)	
新聞部	〃	中川善之助(法文・教授)	
日本共産党東北大学総機	1945年 10月	—	
在外父兄救出学生同盟	1946年 2月 11日	—	
在外同胞救出仙台学生同盟	1946年 2月	—	
社会科学研究会	1946年 3月 10日	新明正道(法文・教授)	
東北大学カトリック研究会	1946年 3月	高橋裕一(理・教授)	
仙台学生救済懇話会の会	1946年 4月 1日	北原新博(工・学生)	北原は1948年3月卒業
農村文化連盟	1946年 5月 1日	—	
全学演劇部	1946年 5月 3日	村田潔(法文・助教授)	
日本青年共産同盟東北大組	1946年 5月 20日	—	
音楽部管弦楽団	1946年 5月 22日	藤田礼(医・教授)	
医学部竹笛会(邦楽演奏)	1946年 6月 5日	—	
社会科学研究会	1946年 10月 1日	—	
東北大学学生組合読書部	1946年 10月 23日	飛田玄武(法文・学生)	飛田は1947年3月卒業
東北学生救済懇話会の会	1947年 2月 21日	米沢治文(法文・助教授)	
工業研究会	1947年 4月 1日	米沢治文(法文・助教授)	
東北大学附属医学専門部合唱団	1947年 5月 23日	高橋ゆき子(仙台市立第七中学校)	
東北大学俳句	1947年 5月	—	
東北大学写真同好会	1947年 10月 1日	桂重次(医・教授)	
民主主義科学者協会東北大学組	1947年 10月 1日	神谷六郎(工・教授)	
かるふるます・ぶたくらぶ(現代詩探究)	1947年 10月 1日	—	
東北ユネスコ学生会	1947年 11月 15日	桑原武夫(法文・助教授)	
工学部学生自治会	1947年	—	

なり発行した最初の会誌。巻頭言には、部長の交替、部員の遭難に触れつつ、新たな歩みへの期待が込められている。

M-4～6. 定期演奏会プログラム3点 1937年(昭和12)/1942年(昭和17)

/1947年(昭和22) 当館蔵/学友会オーケストラ部資料

東北大学交響楽団のプログラム三種。昭和12年のものは、判型が大きく12ページあるが、17年のものは小さな一枚刷の三折で紙質も悪く、22年にはさらに小さな二折である。12年の表紙に「銃後の家庭、慰安の夕」の文字が入るなど、時代の流れに従い様子の変わるのが見てとれる。

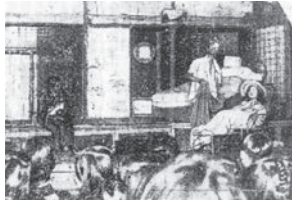
M-7. 新制大学発足記念東北大学大学祭プログラム 1949年(昭和24)10月～11月

当館蔵/学生課移管文書『昭和24年度大学祭関係』

現在と異なり、10月25日に開始、11月3日に終了と比較的長期間にわたり、各学部、各文化部に加え、生活部主催のバザーや体育部主催の各種競技大会も含む形態であった。11月1日に

演劇部

1946年、二高「文化祭」における上演が口火を切り、戦災の残る仙台で盛んな演劇活動が始まった。同年2月に発足した「在外父兄救済仙台学生同盟」の資金獲得を目指し、東北大学友会演劇部が結成され、大学講堂において「アルト・ハイデルベルク」が上演されると、他の学校による上演会も相次いだ。翌年5月には、各校の演劇部からなる「仙台学生演劇連盟」の第1回上演に至った。



「浮標」公演
(1947年6月1日 夕刊とほうく)



今年の仙台演劇界
(1947年12月21日 河北新報)



東北大学中央講堂
旧仙台高等工業学校講堂。演劇やコンサートなど各種活動に使用された

音楽部

東北帝国大学音楽部は、現在のオーケストラ部や合唱団の源流であったが、1943年(昭和18)の第28回定期演奏会を最後に活動停止状態に至った。召集され戦死した団員もあったが、新制東北大学の校友会の下で復活した。戦後最初の「演奏会」は1946年11月、10数人の学生による小規模なものとして始まった。翌年10月の大学祭参加などを経て、同年11月の第29回定期公演が復活の画期となった。

漕艇部

新制東北大学に包摂されることになった第二高等学校には、伝統ある運動部として漕艇部が存在した。新たに設けられた教養部には、二高出身の教員が多く、二高出身の学生と共に、新たな活動を開始した。二高の対部レースを継承する学内レース(後の海上運動会)が設けられた一方で、1950年(昭和25)には二高ボート部出身者によって結成された舵手付フォアが全日本選手権で優勝し、新生東北大学漕艇部の門出を飾った。



松島湾における二高の学内レース(1937年)

1946～1947年の上演題目等一覧

年 月 日	上演団体	演目	原作	会場
1946年 6月16日	二高	愛と死の戯れ	R.ロラン	三神峯二高
6月29日～7月1日	東北大学校友会	アルト・ハイデルベルク	M.フェルスター	東北大学中央講堂
7月	宮城県立女専	女学者の群れ	モリエール	二女高講堂
7月	宮城県立女専	タンジールの死	メーテルリンク	二女高講堂
7月	宮城県立女専	修善寺物語	岡本綺堂	二女高講堂
10月	二高	愛と死の戯れ	R.ロラン	東北大学中央講堂
10月	宮城県立女専	タンタジールの死	メーテルリンク	東北大学中央講堂
10月	宮城県立女専	修善寺物語	岡本綺堂	東北大学中央講堂
11月	宮城県立女専	坂崎出羽守	山本有三	宮城学院講堂
11月	宮城県立女専	太陽の子	真船豊	宮城学院講堂
11月4日	女子師範	たけくらべ	樋口一葉	女子師範講堂
11月6日	東北大学校友会	郭公	J.マークス	東北大学中央講堂
11月20日	宮城師範	桜の園	チェホフ	宮城師範講堂
11月24日	東北大学校友会	郭公	J.マークス	青葉劇場
12月	二高明善寮	商船テナシティ	ヴィルドラック	三神峯二高
1947年 3月	東北学院	太陽の子	真船豊	東北大学中央講堂
5月29日～6月2日	学生演劇連盟	浮標	三好十郎	東北大学中央講堂
6月	二高	カーデフ指して東へ	E.オニール	東北大学中央講堂
7月13日	東北大学校友会	熊	チェホフ	東北大学中央講堂
7月	東北学院	聖餐	有島武郎	東北学院礼拝堂
10月17日～19日	東北大学校友会	幽霊	H.イブセン	東北大学中央講堂
10月	宮城県立女専	海にゆく騎士	シング	女専講堂
10月	宮城県立女専	和泉屋染物店	木下幸太郎	女専講堂
10月	東北大学医学部	?	ピランデルロ	医学部講堂
11月	東北大学工明会	アルルの女	ドーデ	東北大学中央講堂
11月	宮城師範	ワーニャ伯さん	チェホフ	宮城師範講堂
11月	仙台工専	生命の冠	山本有三	仙台工専講堂

※「古い園のうた」IIbから作成

は記念式典や記念講演会(古賀良彦医学部教授「原子病について」)が中央講堂で開催された。法学部の模擬裁判は、この時から開催されている。

M-8. 高橋里美学長大学祭式辞 1949年(昭和24)11月1日

当館蔵/学生課移管文書『昭和24年度大学祭関係』

戦後最初の大学祭における高橋学長の式辞。「現在の大学に要求されるものは、社会生活から遊離した学問研究にのみ終始することではなくて、大学は常に社会を指導し進歩の先頭に立つこと」と説く。学生の下書に学長が手を入れた旨の書入れがある。

N. 在外同胞救出仙台学生同盟

N-0. 解説パネル

学生たちの「戦後」 在外同胞救出仙台学生同盟

戦後の混乱期、外地からの引揚者を支援する学生たちが仙台駅前で奮闘活躍していた。



1946年(昭和21)春、外地に父兄を残す学生生徒を中心に「在外父兄(のち在外同胞)救出仙台学生同盟」(以下「同盟」)なる団体が結成された。この「同盟」には、東北大学や東北学院をはじめとする、仙台の様々な学校の学生たちが学校の枠を越えて集まり、すでに東京で始まっていた同種の運動を参考に、空襲で焼失しバラック建てで復旧した仙台駅前で活動を始めたのである。

当初は駅の出口付近に張られた簡単なテントが引揚者の休息・相談の場所となり、学生たちは交替でここに詰め、満員列車から降りてくる引揚者を迎え湯茶や食事を提供し、重い荷物をもって落ち着き先まで送迎した。彼らの活動はすぐに広く知られるようになり、県や市の支援のほか一般からの寄附も多く集まったという。

同盟はその後、各地の同様の「同盟」や学生運動との関係などの問題を抱えつつも独自の活動を続け、1950年(昭和25)2月に解散した。その資料は、その後宮城学院女子大学の学生による調査・紹介を経て、一昨年東北大学史料館に寄贈された。

N-1. 在外同胞救出仙台学生同盟 在籍校別人数(パネル)

『在外同胞救出仙台学生同盟史』より

東北大学	工学部	56
	理学部	20
	医学部	80
	法文学部	51
	医学専門部	62
	教養部	11
第二高等学校		59
仙台工業専門学校		62
宮城師範学校		17
東北学院専門学校		31
東北薬学専門学校		17
宮城県女子専門学校		35
宮城学院女子専門学校		76
尚綱女学院専攻科		17
常磐木学園		40
その他		6

N-2. 在外同胞救出仙台学生同盟 取扱引揚者数 (パネル)

		1946	1947	1948	1949	1950
シベリア	下車	1	1505	2115	1268	30
	通過	0	14876	22044	3392	54
樺太 (無縁故)	下車	245	1480	466	4	0
	通過		11840	7471	137	0
樺太 (有縁故)	下車	0	440	1473	245	0
	通過	0	798	0	287	0
中 国	下車	5038	18	18	0	0
	通過	37785	162	69	0	0
満 州	下車	6779	1841	51	20	0
	通過	47453	12887	0	35	0
朝 鮮	下車	741	51	17	0	0
	通過	4558	422	0	0	0
台 湾	下車	1274	70	0	0	0
	通過	7643	560	0	0	0
南 方	下車	3516	1027	0	0	0
	通過	17521	13550	0	0	0
そ の 他	下車	44	33	0	0	0
	通過	315	167	0	16	0
合 計	下車	17420	6465	4140	1537	30
	通過	115510	55262	29584	3867	50

N-3. 同盟員の回想 (パネル)

(昭和二十一年)三月九日、遂に待望の駅頭奉仕が実現されたのである。然しこの時は未だ引揚者の休憩所もなく唯あるものは接待用の僅かの湯茶のみ。後は同盟員の肉体と真心だけである。春とは言え寒気尚膚をさす早朝の駅頭に、これはまた常夏の国台湾よりの引揚者が震えながら降り立つ姿、家財道具は勿論の事大部分を彼の地に置き去り、唯リュック一つを後生大事に背に負って、文字通り着の身着のままの姿で、長い帰国の旅に疲れ果て、それでも故郷の地に辿り着いた安心感にほっと嘆息をつく姿を見ては、我が父母もお茶を差し出す同盟員も思わず目をうるますのであった。重い荷物を背負って落ち着き先まで案内する同盟員の気持ちは全く肉親を迎えるのと何等異なることはなかったのである。…

…そして三月十六日には駅との交渉も成り出口近くにテントを張り休息所にあて数日後にはストーブも備付けられた。

『在外同胞救出仙台学生同盟史』より

ある朝駅頭の事である。プラットホームは手足の先が痛む程寒い。

先夜からの疲れも見せず、二、三名の学生が復員兵を案内して二番ホームに出る。まだ汽車が着くには二三分ある。「皆様永らご苦労様でした。どうぞ御元気でお帰りください。

皆様の御幸福をお祈りします」と一人の学生が言う。「どうもいろいろ有難うございました。」とどっと感謝の言葉が出る。この対話は非常に簡単な感謝の言葉ではあるが、之こそ魂と魂の結合であり鉄をもとがす如き熱情的な愛の言葉でなくして何であろうか。

(永井欣一「送られる人 送る人」『同盟週報』第1号)

N-4. 『在外同胞救出仙台学生同盟史』

1950年（昭和25） 当館蔵／在外同胞救出仙台学生同盟資料

同盟の解散に際し編纂された記念誌。同盟の結成から解散に至る遠隔や会員・関係者の回想・手記、同盟員の名簿などが記され、その活動を知る基本資料である。

N-5. 『同盟週報』第1号 1947年（昭和22）1月 当館蔵／在外同胞救出仙台学生同盟資料

同盟員どうしの連絡や親睦のために発行された週報。「送られる人 送る人」と題した寄稿には仙台駅で同盟員の学生と復員兵とのやりとりが記される。

N-5. 腕章

当館蔵／在外同胞救出仙台学生同盟資料

同盟員が使用した腕章。同盟の公印が捺され、同盟員であることの証明となった。

N-6. 在外同胞救出仙台学生同盟バッジ・バックル 当館蔵／在外同胞救出仙台学生同盟資料

N-7. (写真パネル) 同盟員の学生たち (片平キャンパス内の部室で 七夕祭りの飾り付け)

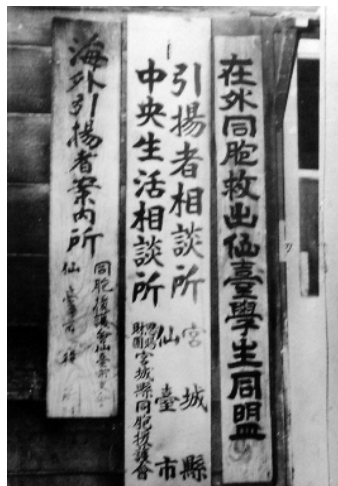
1952年（昭和28）8月8日 当館蔵／在外同胞救出仙台学生同盟資料

N-8. (写真パネル) 仙台駅前のビルに掲げられた同盟の看板 仙台市戦災復興記念館提供

N-9. (写真パネル) 同盟員の学生たち (事務所にて) 当館蔵／在外同胞救出仙台学生同盟資料



N-7



N-8



N-9

N-10. (写真パネル) 同盟員 三神峯 (旧制二高) での花見

当館蔵／阿部照衛氏提供

N-11. (写真パネル) 仙台学生同盟解散式で知事から感謝状授与

1950年（昭和25）2月仙台市戦災復興記念館提供



N-10



N-11

0. 学生組合・生協の誕生

0-0. 解説パネル

学生たちの「戦後」 学生組合・生協の誕生

学生組合の草分け

敗戦後の物資不足の中で、大学の活動はまず物質的な復興を必要とした。教科書や参考書は空襲などの被害をうけ、焼け残った古本なども流通せず、教授も学生も苦労した。書籍の確保のため、自然発生的に「読書組合」が作られた。

一方、学習用ノートに使う紙や、生活のために軍服・軍靴などの物資放出が求められた。それらを入手し配布するため、1946年(昭和21)2月に「戦災学生救護組合」が設立され、県庁工課と交渉して特別物資*を手に入れた。学生たちは疎開先の倉庫に赴き、大変な苦労をして自ら物資を運搬していた。


*特別物資：軍部が郊外の農家の倉庫を借り保管していた物資

東北帝国大学学生組合の誕生

ともに学生生活を支える目的で始まった両組合は、1947年(昭和22)春に話し合いにより統合され、「東北帝国大学学生組合」となった。大学本部の建物奥に部室(事務所兼売店)を確保し、文房具や書籍は厚生課の売店で取り扱ってもらった。当初は書籍の仕入れのため、東京の岩波書店や弘文堂などに学生委員が買い付けに行き、リュックサックに入れて運んだが、本は重い。その後文部省の外郭団体からトラックを払い受け、各地に出動するようになった。

東北大学学校共同組合への発展

1947年5月に全国学校協同組合連合会が設立されると、翌月にその東北地方本部として位置づけられることで、「学生組合」は活動の規模と範囲を広げていった。会計制度の改正(複式帳票の導入)やプリント部の設立などの組織化が進む中で、1948年(昭和23)6月には「東北大学学校協同組合」として新たな段階に進むことになった。これがその後、東北大学生協同組合となって現在に至っている。




創立当時の学生理事(1949年12月) 喫茶公孫樹の前で

学生の回想 *回想は一部を抜粋・要約したものです

学生部長の中川善之助先生にはお世話になった。とても気さくな楽しい方だが、同じことを二度聞くと叱られた。ノートの仕入れのとき、どうしても資金が足りず約束手形の保証人になっていただいた。「本当に大丈夫か」と心配された様子が忘れられない。(法学部K)

資金集めのためクラシックコンサートを開く。「税金は150%、大衆娯楽なら無税だが」という税務署員と、先輩の方も借りて掛け合った。入場費30円のところで、75円も取られた人が来ない。工夫を重ねた結果、会員制に近い開催形態を編み出した。(工学部O)



文化講座のチケット販売(1949年10月)

トラックの運転は命がけ!?

進駐軍の車を追い抜いたり、クラクションを鳴らしたら、怒った米兵に銃で撃たれても罪は問えないと警察に厳重注意された。チェックポイントで酔っ払った米兵にピストルで脅かされ車を一時借用された。敗戦国は悲しい。(工学部K)

*「東北大学生協同組合草創期の思い出」から作成

0-1. 東北大学協同組合の設立趣意書

1948年(昭和23)6月当館蔵/鈴木廉三九文書

「愛と相互扶助の文化的活動」を目指し、設立準備委員会が作成し、定款を付す(裏面に続いている)。4月20日に開かれた設立準備委員会に先立ち、山岸委員長名で出された出席依頼書もあわせて展示する。

O-2. 食堂の復旧 1945年（昭和20）～1947年（昭和22）

当館蔵／学生課移管文書『予算関係書類』・『経費支出関係書類 昭和二十二年度』

学生食堂は金属材料研究所隣の学生集会所に設けられていたが、仙台空襲により隣接する二十五周年記念会館ともども焼失し、営業不能に陥った。まもなく8月1日学生課裏で教官食堂・職員食堂と共に再開されたようだが、戦後になると、しばらく学生診療室に隣接する厚生部売店を間借りして運営されることとなった。1947年（昭和22）9月には木造平屋の第二集会所が新設、学生協同組合経営による「喫茶公孫樹」が開店し、1949年（昭和24）には食堂も設けられた。

P. 学生組合・生協の誕生

P-0. 解説パネル

学生たちの「戦後」学生アルバイト

敗戦から1年以上が過ぎて東北大生は、物価の更なる高まりにより生活が苦しくなる一方であった。1946年（昭和21）12月の大学による東北大生239名の生活調査によれば、学費は平均しても600～700円、最高で2000円掛かる者もいた。内訳を見ると、食費は平均100円、下宿代は300～400円程度で、書籍費は平均150円で医・工学部生が更に多いという。親元の仕送りや自炊による節約にも限度があり、多くの学生は学業のかたわらで学費を得るべく内職をせざるをえなかった。

大学では学生部輔導課が学生に内職を紹介した。内職は日当のほか、労働の軽重に応じて配給米（労務加配米）が支給された。紹介した内職は表のように様々であったが、なかでも給料が高かったのは進駐軍関係で、英語が堪能な学生は通訳・翻訳業務などにありつけた。このほか、弁の立つ者には衆議院議員・宮城県議会議員候補者からの選挙演説の依頼や、法文学部の学生を対象に新聞社から記者の内職（編輯・論説・社説）の募集があった。複数のアルバイト先を掛け持つ学生も少なくなく、また学生部輔導課で紹介する以外にも、学生個人で家庭内職・進駐軍労役（不定期）に従事する者も多かった。

学生部が紹介した内職一覧

出勤先	期間	従人員	日当	作業種類
仙台勤労署 原町進駐軍庁舎	1946/5/26～8/7	2726	15～30円 米1合	土工及雑役
竹中工務店	1946/7/22～8/15	250	25円	雑役
農林省 仙台食糧事務所	1946/7/29～9/30	500	15円 米2合	缶詰種別分割
三井物産仙台支店	1946/8/2～9/4	115	25円	雑役及缶詰分割
本山製作所	1946/9/13～10/10	560	50円	ボイラー取付雑役
仙台更生同盟	1946/11/24～11/26	36	31円5銭 米1合	構瓦整理
薬工工業	1946/12/17～ 1947/1/15	60	20円	工作機械手入れ
仙台市役所	1947/2/1から1ヵ月	150(予定)	14円	統計事務
庄愛商店	1946/12. 平均9日間	6	30円・米2合 雑費	地方店舗調査
家庭教師部	1946/12～	3	1時間10円	
宮城県人事課	1947/2/5～2/10	25	1部3円	選考審査表英訳事務
原町商會	1947/2/14～2/19	250	100円 加配米2枚	雑役 （夜間・午後6時～午後8時）
軍司令部	1947/2/20	2(長期間)	2000円(月額)	翻訳
明治ビル(大町)	1947/2/19	10	35円 加配米2枚	雑役 （夜間・午後5時～8時）
仙台電話局	1947/3/1～3/31	62	30円 加配1合	暖房火夫
原町商會	1947/3/3～3/5	300(予定)	50円・加配米2枚	雑役



1947年6月7日 夕刊とうほうく



1947年9月29日 河北新報

P-1. アルバイトの申込表

1946年（昭和21） 当館蔵／学生課移管文書『学徒労務斡旋に関する綴』

「進駐軍労務者」「土建労務者」など「学徒勤労者」の募集に際しては、学生が大学正門・北門・医学部玄関前にあった本学掲示板の掲示を見て、輔導課に申し込むこととなっていた。展示史料は、内職の人数・期間・場所・内容・給与を記して掲示板に貼られた申込表に希望する学生が名前を直接記入しているもの。

Q. 教育環境の再建

Q-0. 解説パネル（2点）→次ページ

Q-1. 法文学部の授業時間割表

1947年（昭和22） 当館蔵／米沢治文書

法文学部の18の講義室と演習室は、仙台空襲により講義室3部屋へと減少した。当初は講堂や理学部・工学部の教室を仮教室としていたが、木造2階建の建物が完成した結果、1947年9月から仮教室の使用をやめ、旧教室と新教室（5講義室・演習室）からなる自前の教室のみで授業が行えるようになった。

Q-2. 理学部物理学教室の備品調

1947年（昭和22）6月 当館蔵／林威文書

物理学科は空襲により、建物の焼失のみにとどまらず、力学・一般測定（D）・電気学（E）・光学（O）・熱学（H）・磁気学（M）・音動（S）に関する教育・研究用の器械・器具類をも焼失した。開学以来買い揃えてきた3414点の備品のうち、94パーセントに相当する3207点を失った。それゆえ、物理学教室の教官や有力OBが発起人となり、1948年（昭和23）7月卒業生に実験器具や備品等の寄付・貸与を依頼する文書が発送されたのであった（常設展示参照）。

Q-3. 鉱山学科教室用資材物資の払下げに関する連合軍司令部への嘆願書

1946年（昭和21）頃 当館蔵／鈴木廉三九文書

工学部鉱山学科主任教授の鈴木廉三九が和文・英文でしたためた嘆願書。鉱山学科は1944年（昭和19）、鉱山業界からの寄付80万円という裏付けをもとに設立し、校舎予定地の北八番丁で地鎮祭も行われたが、まもなく本土空襲により建設が中止した上、寄付金の未納分（全体の3分の2）も敗戦のため御破算となった。鈴木は嘆願も奏功しなかったとみえ、結局寄付金の残りも敷地買収手金の返還分など20万円をもって評定河原に木造バラックを建設、臥薪嘗胆の日々が続くこととなった。

Q-4. 金属工学科卒業研究発表会について綴る主任教授の日記

1946年（昭和21）9月13日 当館蔵／工学部金属工学科文書

工学部の中で最も空襲の被害が少なく済んだ金属工学科においても満足に学問が行える状況にはなかった。当時主任教授であった的場幸雄は、1946年9月卒業生の卒業研究発表会の席上、「研究資材の不足、設備の半身不随に加えて食糧の不足は安定した日常の生活を奪ふと云ふ有様で実に難行を極めました」としつつ、「何卒充分な自重を以つて諸君に課せられた使命の遂行に進んで頂き度いものと存じます」と力強く挨拶をのべた。しかし、事前に準備していた原稿の「今更私はこの壇上に於て諸君に教訓めいたことを語る必要もないし、又語るべき何物も持って居ない」との自身の無力さについて言及した一節はあえて読まなかったようだ。当時の帝大教官の置かれた立場がうかがえる史料である。

学生たちの「戦後」教育環境の再建 (理学部・法文学部)

理学部

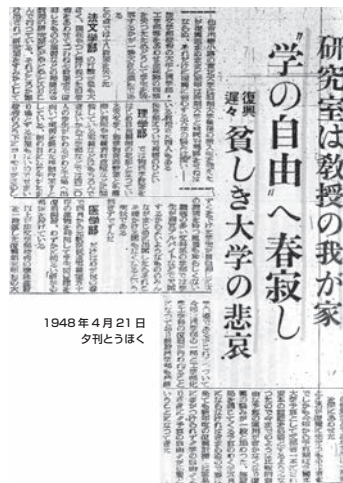
理学部で最も空襲の被害が大きかったのは、物理学科であった。理学部本館2棟のうち、南側の木造2階建物(物理学・数学教室)が全焼、北側建物は赤レンガ壁だけを残して焼失した。10月からの新学年開始にあたり、物理系学科は講義を仙台臨時教員養成所建物と金属材料研究所講堂で、1年生の一般物理学実験は工学部の実験室を借用し、2・3年生の研究実験は金研・科学計測研究所・東北金属の施設を借用して実施した。敗戦直後は焼失建物再建は困難であったが、1946年(昭和21)から焼け残りの赤レンガ壁を利用した木造バラック工事が開始され、1948年(昭和23)ごろまでに必要最小限の講義室・一般物理学実験室・学生研究実験室が用意された。新築工事が開始されるのは1954年(昭和29)を待たねばならなかった。

法文学部

法文学部は空襲により木造建物をすべて焼失、2研究棟・1講義棟を残すのみであった。戦災をまぬがれた講義室は大定員で、定員百人程度の中教室が全て焼失したため、文科のような少人数の学生の講義は研究室を利用したが、法科や経済科の講義については当初講堂を2つに区切って使用したり、工学部や理学部の教室で空いている時間に間借りするなどした。やがてバラックの木造校舎ができると、1947年(昭和22)9月仮教室での授業によりやく終止符を打つことができた。

学生の回想 ※回想は一部を抜粋・要約したものです

教室での講義では、何しろ戦災で窓ガラスも破れたままだったので、厳冬などでは寒くてたまらない。陸・海軍軍服にそれぞれの外装を纏ったわれわれはともかく、疲弊したオーバーで身を包まれた教授が、風邪でもひかれなかつたらハハラしたものである
(法文学部、壺井一郎「大学時代の苦勞と喜びの思い出」より)



1948年4月21日
夕刊とうほく

学生の回想 ※回想は一部を抜粋・要約したものです

その後、触れると衣服に白い粉が付着する荒れた内壁はそのまま、2階の高さまで古代遺跡のように残っていた赤煉瓦の壁に、床と屋根を張った教室で、削ったままの白木の長椅子と細長い机を並べて待望の講義が再開されるまでになった。電気料の一室を借りて手造りの装置での一般物理学実験、金研、科研等に分散しての卒業研究、食糧休暇、燃料休暇等、勉学の上では希薄であったが、変化の激しい3年間が過ぎ卒業式を迎えた。その夜、卒業生と一緒に諸先生を招いて赤レンガの教室で謝恩会を開いた折に、定年退官する小林先生が素晴らしい三味線の名曲を演奏され大きな感銘を受けた
(理学部物理学科、藤崎春雄「国破れて、物理は。」より)



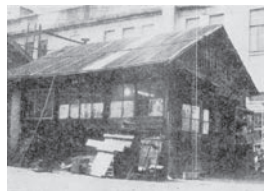
1947年冬に一般物理学実験室で行われた小林巖教授退任祝賀ニュートン祭での小林の三味線の演奏と天井のない実験室での祝賀風景

学生たちの「戦後」教育環境の再建 (工学部)

化学工学科

工学部で最も空襲の被害が大きかったのは化学工学科であった。空襲当初、疎開が予定されていた金属工学科の科学実験室と、本部の一室を製図室として借用、また電気工学科の実験室を間借りした。また焼け残ったコンクリート建物と金属工学科の赤レンガ建物に研究室を設置し、形ばかりの卒業研究が行われた。不用になった防空壕は取り壊し、その資材を利用して鍛冶屋場とした。

実験に用いる器機や薬品も何もなかったため、1945年(昭和20)11月ごろから熱心に獲得活動が行われ、結果として1946年(昭和21)6月、第一陸軍造兵廠仙台製造所(原町)の化学薬品・ガラス器具などの8割(当時の価格で約7万円)の払い下げを受け、このうち化学工学科・非水溶液化学研究所で80パーセントの配分を得ることに成功した。1949年(昭和24)3月20日に校舎焼跡の北に木造2階建物が完成し、本格的に復興の一步を踏み出すことになる。



防空壕資材で建設した鍛冶屋場

教員の回想 ※回想は一部を抜粋・要約したものです

当時の物資欠乏は今日まったく想像もつかないほどの惨憺たるものであった。実験のための薬品・器具・熱源すべてが皆無に近かった。市ガスは圧・カロリー共に不足で、バーナーの空気孔を開けるとすぐに消えてしまうような状態であり、それが時限供給であった。電力・電圧も低く、少し使いすぎると停電になり仕事はほとんどできなかった。時には戸外から枯れ木を集めて炊火してフラスコを加熱するようなこともした。試薬ビンには駐留軍から払い下げられたビールの空きビンを利用した。学生実験用の化学天秤は焼け残りのガタガタのものが4台ほどあった。試験管は1人3本、ピーカーは2人に1個程度のものであった。1946年から1952年頃に卒業した学生の実験は全くひどいものであった
(化学工学科、沢谷次男「講座のあゆみ」より)

鉱山学科

鉱山学科は1944年(昭和19)の創設以来専用の教室をもっておらず、総長室などを借用していたが、仙台空襲の結果立ち退きを余儀なくされ、1945年10月、岩ヶ崎に疎開していた航空学科の教室を借用した。しかし航空学科の建物も空襲で被災しており、教室の中を送電線が通って窓も閉められない状況であった。1946年10月、工業力学科(航空学科)が疎開先から戻ってくることとなり、今度は評定河原に建設中の武道場をバラックに仕立てて教室を確保した。しかしこちらも粗末な板で間仕切りした建物であった。1949年に通信工学科の建物の一部、また包摂した仙台工業専門学校校舎を使用できることとなり、9月によりやく評定河原の仮校舎を引き払うことができた。

鉱山学科を創設した鈴木先生は、終戦の時期には大学が潰れるか立つかという土壇場で「血潮が逆流するような屈辱を私は何回も忍んで」本学科を守ってこられたという(鉱山学科、「地球工学」より)



「工学部鉱山学科」の立札と鉱山学科の学生



旧仙台工業専門学校校舎前での鉱山学科集合写真
前列右から7番目が鈴木廉三九教授

R. 学生新聞に見る戦後の学生生活

R-0. 解説パネル

学生たちの「戦後」学生新聞に見る戦後の学生生活

1946年(昭和21)6月5日、『東北学生新聞』が発刊された。当初は、東北帝国大学の新聞部学生によって『東北帝国大学新聞』(1935～1938年刊行)の復刊を目指していたが、敗戦直後の資材不足の中、政府の新聞用紙割当委員会との折衝の過程で、「東北地方の各学校のニューズも掲載する」という条件が示され、最終的に前記の名称になったという。

新聞社の部室は片平地区の東北帝国大学本部内に設けられ、中川善之助(法学部教授)を部長とし、印刷は河北新報社に依頼していた。1946年段階の部員は25名(内訳:法文13、工9、医2、理1)であったが、翌年からは東北地方の旧制高等学校、専門学校生徒もメンバーに加わった。創刊当時は東北地方唯一の学生新聞だったため、東北地方各地の学校等から購読申込みがあり、発行部数は1万5千部にのぼった(月3回発行)。記事の内容も、東北各地の学校の話が見られた。

その後、各地の旧制高等教育機関が新制大学になり、各々が新聞を発行するようになったため、『東北学生新聞』は100号発行(1950年6月)を契機に『東北大学新聞』と改称し、学内新聞として新たなスタートを切った。

R-1. 東北学生新聞 第56号(複製)

1948年(昭和23)7月15日 当館蔵

R-2. 東北学生新聞記事抜粋(パネル展示)

●編集後記(1946年6月3日)

- ▽漸く我々の新聞が出来た、本紙の前身は昭和三年東北大学法文学部で発刊された「法文時報」、昭和十一年創刊の「東北帝国大学新聞」である、今回名称を「東北学生新聞」と変へたのは従来の孤立的態度を一擲し、広く東北地方学園民主化の線に沿はんが為に外ならない、たゞ本号が果してこの趣旨を実現せしめてゐるかどうかは疑問であるが、今後地方委員の充実に従つて発刊の趣旨を具体化してゆきたいと思ふ、編輯が極めて杜撰であるのは全てが素人の学生に依りなされたからである、大方の御叱正を乏〔乞〕ふ
- ▽尚発刊が非常に遅れたのは印刷資材の関係で円滑にゆかなかつた為である、深謝する次第である

●休暇繰上げ必至-頼みの寮も続々閉鎖

東北帝大でもそれぞれ百名内外を収容する霽風寮、松風寮が遅配のため運営不能に陥り県および学校当局の努力も空しく二十日より当分の間閉鎖されることゝなつた。休暇に対する希望も遅配直前の工学部工明会の調査によれば七月一日よりといふのが大多数の五三%

を占めてみたが六月十五日の医学部学生の調査によれば六月二十日よりといふのが医専共に八十名にも達してゐる、これに対し十八日の学部長会議の結果六月一杯で打切り試験も卒業生以外は延期するといふことが発表された。

●学園消息-東北大学-(1946年6月20日)

化学教室の民主化 理学部化学教室では教授、助教授、化学懇話会代表および学生自治会代表をもって構成する化学教室協同委員会がうまれ教室運営の民主化に確固たる体制をと、のへた、すでに委員会も開かれ種々の懸案をきはめて友好裡に処理しつゝある

自然科学談話会 理学部の有志、職員、学生によつて五月初旬自然科学談話会が誕生、隔週一回例会を開き科学関係のみでなく各方面の専門家の話を聞き質問討論を行つてゐる、今後は講話のプリントを会員外の希望者にも□□で配布し全学的啓蒙にも寄与するほか将来は学外にも働きかける

農村セツルメント 法文学部有志学生は農村セツルメントにのりだし、最初は厚生関係を主とし五月十八日には医学部松岡助教授の出張をもとの宮城県互（〔亘〕）理郡吉田村で無料診療を実施したが村民六十名が受診した、次回は黒川郡の無医村巡回を行ふ予定、将来は定期診療所を設ける計画でおひおひ文化啓蒙にも活動するはず

講演と音楽の会 医学部では六月一日講堂に宮城高女講師佐々木幸徳氏とその愛弟子田島富子嬢および島、山手、木村の諸嬢をむかへて講演と音楽の会を開催した、篠田部長の挨拶あつて佐々木氏の講演に入り諸嬢の演奏をまじへての熱演は講堂を魅了した

工明会の野球戦 八日工明会野球大会が行はれ工学部長西沢教授をはじめ各科教授も学生の応援団の中に姿をみせ教授、学生一団となつて美しい一日を送つた

●無責任な学校当局—医専学生方途に迷ふ—（1946年6月20日）

医師の国家試験制度の発表は、全国の医学生の間にも多大の問題を投げかけたが、この場合もつとも大きな打撃を受けたものは、戦時中軍関係の需要に応じて創設された臨時医専の生徒であらう、彼らは帝国大附属医専として優秀な教授と豊富な設備に恵まれてはゐるが、専任の教授もなく、専有の病院もないため、独立の学校としての自主性と矜持を持ち得なかつたそれで今寝耳に水ともいふべき国家試験の報に接して、一身の安定さへ保護されぬことになり、或る者は激憤を抱き、或る者は絶望に陥るにいたつた、しかもかうした事態にたいして、学校□後はなんらの処置をとらず、学生は自力で進路を開拓してゆかなければならなくなつた、四年生の講義は本年四月をもつて終了、あとは卒業までどこかの病院で実習をせねばならぬのであるかかる場合にも学校は全然斡旋の労を執らず、学生は各自つてを求めてゆくより外なかつた同医専ではすでに新入生の募集を行はず、早晚解消することになつて居り、現在在学中の二、三年生の進路は可成り荊□にみちたものであらう、四年生十数名はかゝる下級生のため、進路を拓いて置いてやらうと、秋田県大館に「北萩寮」を設け、公立病院に実習に通つてゐるが、生活面経済面の苦勞は並々ならぬものがあるやうで学校当局の激励援助が要望されてゐる

●休暇もよそ一学徒のアルバイトー (1946年8月15日)

ながい暑中休暇を深刻な生活難と向学心とのギャップにくるしむ学生達はいかに暮してゐるか、遊山旅行にすごしたかつての休暇と異つて現在の学生にとつては戦争による学問の立遅れと学資の不如意と物心両面における欠乏を一挙に挽回すべきかきいれどきであつて半数以上はなんらかの仕事に従事してゐるものとみられる

東北帝大 休暇まへは進駐軍関係労務に従事する者が圧倒的で、一時は二百人に上ることがあつた、一日十五円で比較的軽微な労働であり、殺到したのも無理はないと思はれる、休暇中はぐつと減つて二十名内外、そのほか翻訳、家庭教師、タイプ等に従事してゐる者があるが、その数は多くない、農村方面は学生の気持としては希望するところだが、現在は除草も終つて比較的ひまな時節であり、農家の人手過剰もあつてあまり歓迎されぬ模様、研究室、図書館は森閑で精励な助手達や卒業論文に血眼の法文系学生が散見するばかり、大部分の学生は郷里へ帰つて仕事についてゐるものと思はれる

●卒業生の就職難打開へー東北学院に委員会ー (1947年11月15日)

東北学院では卒業生の就職状況がとみに悪化しつゝあるため職員を中心として就職あつ旋運動に乗出すことになつた、さる九月四日の職員会議で卒業生に対する就職あつ旋委員が定められ、委員長には経済科長小田教授があたり、また各組の組主任および庶務課長大泉小平氏が委員となり、取あえず新卒業生英文科十九名、経済科六十四名、計八十三名の就職あつ旋にあたるが、その成果を期待されている

●論説 文化祭をかえりみて (1947年11月15日)

次に今秋の文化祭のすべてに共通する大きな特徴は、その企画から実施にいたるまでのすべてが、ほとんど校友会、学友会、自治会等学生期間を中心に、学生のみによつて行われたことである。かかる例は従来のこの種行事に見られなかつたところであり、過去の不当な干渉圧迫を思う時、教育方針の開化もさることながら、学生の自主的能力の伸張が証明されたものといつてよかろう。このことはまた一部学生の負担を極端に重からしめる結果になつたが、これはあくまで学生相互の友情と協力によつて解決してゆくべきものであり一部に非協力的な学生の見られたことは反省すべきことであろう。また一部学生がそのため独裁的傾向を持つ結果になり能率的にも感情的にもブレーキになつたことは、これまた自己の能力を過信した人々の深く反省すべき点であろう。かかる行事は決して一部の活動的學生にのみまかさるべきものではなく、全学園の努力の結晶として公開さるべきで、またそうしてこそ始めて深い意義が見出されるのである。文化祭の休暇を旅行帰省等他の目的に利用した学生も少くなかつたが、こうしたことは決して許さるべきではなく、あくまで自己の能力の範囲内で協力すべきであつたろう。今回もそうであり従来もとかく多かつたこうした弊害を今後努力して一掃せねばならない。また今秋の文化祭の催しの特徴として音楽会、演劇会等料金を徴収したものが少くなかつたが、これはあくまで学校の経済的援助で行うのが建前であるにしても、現在の社会情勢から見て不当なことではなく、きん少の料金で優秀な内容を公開することが出来ればむしろ望ましいことである。しかしこれはあくまで変態的なものであることを忘れてはなるまい。

●仙台学生新聞連盟発足す（1947年12月15日）

仙台市内各校新聞部の相互連絡を緊密にするため仙台学生新聞連盟が結成され十二月九日午後三時東北大本部会議室で発会式を挙げた、参加校は現在新聞を発行している東北大、東北学院、仙台工専、宮城学院および新聞研究を持つている宮城師範の各校であるが、将来は二高、宮城女専、尚綱女専、常盤木女専などにも呼びかけ、更に来年度からは新制高校も加え将来は東北大学新聞連盟の結成にまで推進する意向で当面の具体的な運動としては用紙の一括獲得、情報交換、批判討論、共同研究、講師招へいなどを計画している、在仙各校の現況は次の通り

S. 学生が選んだ東北大生の戦争体験

S-0. 解説パネル

実習学生の選んだ「戦争体験記」

—東北帝大・旧制二高学生等の回想録から—

展示会場では、資料とともに、当時の学生たちの当時の手記やその後の回想録をいくつかご紹介しました。しかしそれは、戦時下の東北帝国大学の学生が残した数多くの証言のなかの、ほんの一部にしすぎません。またもちろん、東北帝大のほかに、旧制第二高等学校をはじめとする、のちに東北大学に包括された諸学校の学生たちも多く記録・回想を残しており、それもまた広い意味で「東北大生」の戦争体験記といえるでしょう。さらに当時の教員や職員の書き記したのも重要であることはいうまでもありません。

ここでは、展示の本編では紹介しきれなかったこれらの数多くの体験記のなかから、現在の東北大学の学生（博物館学館園実習の受講生）たちが選んだいくつかの体験記を紹介します。

S-1. パネル「学生たちにとっての「学生生活」」

学生たちにとっての「学生生活」

…その間の〔明善〕寮での生活と行事についての記憶も稀薄だが、何れにしても、当時二高全体或いは明善寮が特に強かったのかも知れないが、大勢を占めていた右翼的国粹主義的な空気の中での鍛錬至上主義に、精神・肉体両面で大いにしごかれ且つ悩まされていた事は間違いない。当時の私自身の「幼さ」にもよると思うが、少なくとも旧寮生の意見・思想に反対出来る状況でもなく、ただ言われるが俣に行動するだけであったが故に余計精神的抑圧感が強かったのかも知れない。しかも、平時なら並行して行われる筈の学校での授業が殆ど皆無なのだから全く救いが無かった。…(中略)…ストーム・マラソン・グライダーなどで肉体的にしごかれるのは未だ結構、然し精神的・思想的・文化的な面での強制洗脳に耐えるのは意外に苦痛なものだと思う。

…そして（昭和二〇年）一〇月の初めから、曲がりなりにも、寮生活（北六：明善寮）と学校（富沢：旧陸養校舎）の教室での授業の両方のあるノーマルな高校生活が再開された訳である。勿論、敗戦直後の混乱時期で生活の実態は極めて悪かったのは言うまでも無

いが、兎に角、普通に学生生活を過ごす事が出来る事が、こんな素晴らしいものだとは思ってもしなかった。然も、その高校生活の内容は極めて速やかに平常状態に戻って行ったのだから驚きである。敗戦・連合軍による占領・統制から自由への変化・軍国主義から民主主義への転換・空襲戦災による日本全土の荒廃・二高校舎の焼失・食料を中心とする物不足と凄まじいばかりのインフレ……これだけ大きな変化・変革・生活の質の低下にも拘らず、少なくとも表面的には、曾ってそうであった様な旧制高校生活のパターンを急速に取り戻して行ったのである。

柴田穰「懐かしくも ほろ苦い記憶」(『山紫に水清き－明善寮白貌大一寮物語－』より)

《昭和20年4月旧制二高入学》

※〔 〕は編集時の補筆

S-2. 「勉学に対する学生たちの思い」

勉学に対する学生たちの思い

やがて医学部の講義再開と聞き、明善寮に戻って来た。三室に集まった連中で、これからは如何なる主義主張思想信条にも踊らされまい、只管ら各自専門の学問に没頭しようと誓いあった。その頃野口〔二高〕校長と最後の幼年学校長山田中将との話合いで、二高が明善寮共々そっくりその俣三神峰の幼年学校跡に移る事になった。旧寮生気取りで、畳や机の上の一寮旗をたなびかせ、トラックの荷台に乗って行ってみると、寮に割当てられた部屋は大きく、いかにも幼年学校らしい小さな机が散乱していた。一寮は出来るだけ前の型にしようと、三分の一隅に全部机を押しやり、一段高くした上に持参の畳を敷きつめ、残りの板の間にあの傾斜のあるごつい机を置いたが、部屋が広いので一室一五名の部屋が三つ程になったと思うが…(後略)

阿部政次「白貌大一寮での七年間」(『山紫に水清き－明善寮白貌大一寮物語－』より)

《昭和17年旧制二高入学／昭和19年10月東北帝大医学部入学・同23年卒業》

(昭和二〇年)九月中旬早くも授業が再開され、西多賀校舎に北六番丁の寮から遠路はるばる通うことになったが、航空班の存続は考えられず、我々の魂の拠り所であったグライダーが、旧敵軍の手に落ちるよりも我々自ら焼却しようということに衆議一決、宮城野原から寮庭に運び奉焼式を行った。一一月一五日の台の原明善寮分散式、一六日の一寮分散コンパを経て寮自体も三神峯に移り、次いで軍学徒の入学と環境は急激に変わっていった。

我々の二高時代は敗戦の日を概ね真中に挟み、戦争末期と戦後の混乱の中にあった。

…生き延びたことをつくづく幸運であったと感じる一方、もっと充実した高校生活を過ごしたかったという思いは未だに深いものがあるし、戦中戦後の動乱時代だったとは言え、余りにも不勉強のまま野郎自大な一人よがりでも過ごしてしまったことが悔やまれる。

田波弥一郎「敗戦前後の私」(『山紫に水清き－明善寮白貌大一寮物語－』より)

《昭和19年旧制二高入学・同22年卒業》

S-3. 「終戦のあと・さき-学べぬ学生-」

終戦のあと・さき-学べぬ学生-

制度上も二年半に短縮されていた高等学校において、断続的あるいは継続的な勤労働員のために半歳以上を奪われ、実質上二年にも満たぬ学生生活を余儀なくされてきた。仙台における最大のそしてまた唯一の願いは、専心学業に打ち込むことのできる本来の学生生活を送ること以外にはなかった。それも、事態はすでに完全な三年間の大学生活を許さないような段階にきていた。巷には学園閉鎖の声すら聞えた頃である。われわれは、僅かに一年ぐらいの継続的學生生活しか望みえなかった。…講義が開始された。むろん変則的な短縮講義である。…しかしわれわれはすこしも不満を感じなかった。勉強ができる、講義が聴けるということだけで充分だったのである。……八月十四日伊勢崎は最初にして最後の空襲に見舞われた。翌日工場の焼跡を整理しつつ、われわれは敗戦を知った。学生は、各人各様の思いを抱きつつ故郷へと帰って行った。

それからの一年は飢餓の時代である。…大学では十月から講義が初められた。…しかし出席する者は全体として少なかった。わたくしもこの一年間はほとんど講義に出なかった。寮に閉ぢこもって空腹をこらえていた。…最後の一年間は、ようやく虚脱を抜け出して、講義を聞いた。しかしなんとなく入学当初のような学問への情熱は湧いてこなかった。栄養失調は肉体のみならず頭脳にまでおよんでいたようである。…

…以上がわたくしの法文学部時代の思い出の一端である。最も学生らしくない学生生活の点描といえよう。

山畠正男「終戦のあと・さき」(『東北大学法文学部略史』)より

S-4. 「^{死地}戦場へ赴く」^{死地}戦場へ赴く

招集をうけたのは昭和十九年、卒業の前であった。論文は八分どおりで、まだ完成していなかった。覚悟はしていたものの、「やられた」という挫折感が強かった。京都府立大学の寿岳章子さんは国語学の学生で、そのころ家に書き送った書簡を近ごろ出版された(『東北発信』)。そこにはこう書かれている。「多気田さんは出征です。よく勉強する人でした(…)のに。研究室にも残れる人でした(…)。戦争がなかったら、全然違った一人の生涯が生まれるところでしょうに。」

多気田は私の旧姓である。よく勉強したことは関係がない。この句が過去形で書かれていることに注意してほしい。つまり、多気田はここで死んだことになる。寿岳さんの無礼を責めるのは当たらない。それがもう戦争末期に近い当時の一般的な実感であった。「絶対に死なないぞ。必ず研究室に帰ってくる。幽霊になっても。」私の決意であった。これからという人生を絶ちきられて、死の影の前で観念の眼を閉じながら出征していった若者たち、みんなみんな「戦争がなかったら……。」恐ろしい時代であったとしみじみ思う。…

…大阪で裸で焼け出された姉が乳飲児をかかえて惨めな生活をしていたが、その姉が「早く負けてくれた方がよい」と言ったのである。「憲兵に聴かれたら大変だよ」とたしな

めたが、ひどいめにあっている銃後の国民たちの、それが偽りのない真情であることを直感した。故郷の友人たちは衡陽作戦で多く戦死していた。幹部候補生になったから私は助かったのである。見習士官の服装で元気な姿でいることに私はうしろめたい思いがした。歩兵の見習士官は消耗品である。もう直ぐ死ぬのだという思いで、私は故郷を離れた。

金谷治「書きたくない思い出」(『明日の君達へ』)より

S-5. 「せまりくる軍靴の響き—女子学生と学徒出陣—」

せまりくる軍靴の響き—女子学生と学徒出陣—

見送りを 拒む背を見せ 征きたりき
仙台駅頭 冥き冥き灯

私のなかに忘れていた光景が浮かんできた。そしてそのことを書いておきたい気持ちになったのである。それは夜の仙台駅に、出征する学生を見送った時の光景である。時は多分、昭和二十年の春ごろであったろうか。

昭和二十年が明けると、二年生で、戦争にゆかずに残っている男子学生と私たち八人の女子学生は、陸軍造兵廠仙台製造所へ通年動員となった。すでに三年生の残留組の学生達(女子学生一人を含み)が働いていたのに合流するかたちとなった。そしてこの三年生は六月には卒業を控えて勤務が解かれたので、私たちが三年生と接したのは、この半年ばかり。それでも人数が少ないので、いつか顔なじみになっていた。そんな中の学生の出征を見送った夜もあったのである。

…巷の出征兵士を送るときよく歌われたのは軍歌であった。「天に代りて不義を討つ 忠勇無双のわが兵は 歓呼の声に送られて 今ぞ出で立つ父母の国 勝たば生きて還らじと 誓う心のいさましさ」(日本陸軍・大和田建樹作詞)等を日の丸の旗を振りながら歌っている光景が思い出される。

でも私が見送った学生たちの場合は、軍歌も歌わず万歳もした記憶はなかった。(中略)いずれの夜も、街も駅もくらく、日本自体が深い暗黒に沈みこむような時代の出征であったのだ。

原田夏子「冥かった仙台駅」(『回想 東北帝国大学』)より
《昭和18年10月東北帝国大学法文学部入学・同21年9月卒業》

S-6. 「戦争と平和の狭間で－玉音放送と学生たち－」

戦争と平和の狭間で－玉音放送と学生たち－

…今までの緊張が一度になくなり、茫然となりました。一部の人は既に、この事を予想していたようですが、私はその朝になって、重大発表があると知らされやっとこれで敗れたのかと思いました。

15日の日記には、かなり興奮して色々書きつづり、今後何十年か、塗炭の苦しみをなめなければならぬだろうと書いて居ります。

田島栄一「当時の日記から」(『九葉会々報』)より
《昭和19年東北帝大工学部化学工学科入学・同22年卒業》

…傷心を抱いて郷里に帰ったが、何を見ても腹立たしく、敗戦を喜ぶように酒を飲んでいた親父の客達の席へ、抜刀して暴れ込んだり、禅寺で絶食してみたり、二・二六事件三上中尉の昭和維新の歌や中杉山分散歌を歌っては、独りでポロポロ涙をこぼしていた。

阿部政次「白貌大一寮での七年間」(『山紫に水清き』)より
《昭和17年旧制二高入学／昭和19年10月東北帝国大学医学部入学・同23年卒業》

…陛下の声を聞きとったときも、しばらくは終戦の実感が湧かなかった。しかし、最前列におられた黒川教授と武藤教授が拳で眼がしらを拭うのを見て、ようやく私にも敗戦の悲しみが湧いてきた。しかし、心の奥底では、これで戦争も終わったかと思うと同時に、来るべき米軍進駐の最悪の事態の予感に心がゆらぐのをおぼえたのであった。

山形徹一「仙台空襲から敗戦まで」(『明日の君達へ』)より
《昭和11年東北帝大医学部卒業／昭和17～32年医学部助教授》

…複雑な気持で下宿に帰り翌日一応学校へ出て見たら的場先生の講義が時間表通りにあり「別令があるまで予定通り講義を続けます。」と前置をされて普段通り講義が続けられた事も思い出される。斯様に学校は当時は、学問をするための場所であり、学業を行うことが優先する所であったとしみじみ思うにつけ、現在の学生生活との差を感じる。

板岡隆「戦中・戦後の学生生活」(『るつぽ』)より
《昭和19年東北帝国大学工学部入学・同22年卒業》

T. 東北大生の戦争体験（まとめ）

T-0. 解説パネル

東北大生の戦争体験

虚脱と安堵が入り混じる混沌のなかで、学生たちの「戦後」はスタートした。戦争の終わりを「学徒兵」として戦場で迎えた者、勤労働員先の工場が悪戦苦闘していた者、科学報国の名の下に大学で「動員」されていた者…。

学生たちは、それぞれの「体験」を背負って学園復興のスタートラインに立ち、「戦後」の社会へと巣立っていった。もちろんその陰には、戦場や動員先で命を奪われた学友たちの存在があった。

戦中・戦後にかけての時期を東北大生として過ごした若者たちは、自身の経験をもとに、「戦争」をどのようにとらえ、「戦後」に何を見いだそうとしたのか。その思いに触れることが出来る資料や記録を、私たちはどのように受け止め、伝えていくべきだろうか。

T-1. 昭和22年度卒業式学生総代答辞 1948年（昭和23）3月 当館蔵／庶務部入試課移管文書

法文学部法科の川又一雄氏が読んだ答辞。川又氏は1943年（昭和18）12月に学徒兵として入隊したいわゆる「学徒出陣」学生の一人。戦後復学したあとは、法文学部学生委員として活躍するなど学生のリーダー的存在であった。